

文部省檢定
大正三十一年一月七日

師範學校國語教科書

吉田彌平編

本科用

師範學校
國文教科書

東京 光風館藏版

卷四

0

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

教科書文庫

4

810

51-1924

2000040732

文部省檢定
師範學校國語教科書
大正三十一年一月七日

資料室

328.9
Y019



師範學校

吉田彌平編

國文教科書

本科用

東京 光風館藏版

広島大学図書

2000040732





吉田節平蔵

本館印

師範學校 國文教科書 本科用卷四

目次

一 偉人その一	嘉納治五郎	一頁
二 偉人その二	嘉納治五郎	二
三 妹にさとす	吉田松陰	三
四 擣衣	清水濱臣	七
五 里祭	伴蒿蹊	六
六 名物		三
七 千里が竹その一	近松門左衛門	三

目次

八 千里が竹その二 近松門左衛門 三七

九 相模灘の落日 徳富健次郎 四〇

一〇 室内の花 與謝野晶子 四二

一一 光頼卿の参内 [平治物語] 五

一二 佐那田餘一その一 [源平盛衰記] 六

一三 佐那田餘一その二 [源平盛衰記] 六

一四 武士道 山路愛山 七

一五 狐塚 [狂言記] 八

一六 能をつかんとする人 兼好法師 九

一七 四時のあはれ 兼好法師 九

一八 福澤先生を悼むその一 島田三郎 九

一九 福澤先生を悼むその二 島田三郎 一〇

二〇 賀茂真淵 伴 蒿 蹊 一一

二一 春の心 二八

二二 師の説になづまず 本居宣長 三三

二三 こゝろ 北原白秋 三五

二四 扇の的 [平家物語] 三七

二五 落花の雪 [太平記] 四三

二六 敵討以上その一 菊池 寛 五一

二七 敵討以上その二 菊池 寛 五二

二八 敵討以上その三 菊池 寛 五二

附 錄

第四篇 表記法

一 送假名法 一

二 句 讀 法 七

三 分 別 書 方 一〇



師範學校 國文教科書 本科用卷四

嘉納治五郎

教育家。
前東京高等師範學校長。
貴族院議員。
萬延元年(五三)生。

一 偉人 その一

嘉納治五郎

古來の生民蓋し幾萬億、其中より卓然として崛起し、功業
 德澤炳として萬世の下に輝いて居る者は、實に彼等偉人で
 ある。若し偉人を人類の歴史から除き去つたとすれば、吾
 人の過去は如何に暗澹として如何に寂寞なものであらう
 か。幸にして幾多の偉人・傑士が星の如く歴史の空に列ん
 で居て、今猶吾人の心中に其の不老の輝を投じ、其の破闇の

一 偉人 その一

一

光を耀して居るので、吾人人類は此に始めて意義ある過去を有し、光榮ある現在を有するのである。随つて吾人の文明は彼等を離れて解釋することは出来ない。吾人の經營しつゝある事業は、彼等の遺業を繼紹して之に新發展を加へんとするに外ならぬのである。古語に「大上は徳を立て、其の次は功を立て、其の次は言を立つ」と云つてあるが、徳にもあれ功にもあれ言にもあれ、彼等が人類に及した影響は不朽不滅である。凡そ世の中に壯快といへば、偉人の事業より壯快なものはなく、崇高といへば、偉人の人格より崇高なものはないのである。

試に思へ。我が國が明治の御代になつてから長足の進歩

大上は
大上有立德
 其次有立功
 其次有立言
 雖久不廢
 此之謂不朽
 左傳。

を爲し、世界の奇蹟とまで稱せらるゝに至つたのも、其の直接の原因は王政の維新にあるのである。さうして王政の維新は幾多の偉人、傑士の努力奮闘より生じた結果である。

去歲干軍瀉
 我疆今朝孤
 劍入他鄉一
 生萬事變如
 夢。一片依
 然男子腸。
 戊辰之歲
 松菊狂生。

去歲干軍瀉我疆今朝
 劍入他鄉一生萬事
 變如夢。一片依然
 男子腸。

戊辰之歲 松菊狂生

(藏澄謙松末) 蹟筆允孝戸木

至誠皇室を尊び、衷心民人を愛し、大勢の趨く所に着眼して、經國の大本を定め、謀慮深遠、規畫周密、大いに皇猷を賛した

筆蹟

奉勅單航向
北京、黑煙堆
真藏波行。和
成忽下。通州
水、閘、臥蓬
臆、夢自平。甲
東。

のは彼の木戸松菊であつた。高く自ら任じ、篤く自ら信じ、沈毅端嚴、善く謀り善く斷じ、時局の紛難を處理すること、快刀の亂麻を斷つが如く、凜々たる英風、よく上下の信賴を得

(藏昌通能得) 蹟筆通利保久大

て國家の柱石となつたのは、彼の大久保甲東であつた。光明磊落、規模宏遠、安危利害の上に超脱して、泰然として動かず、曠懷偉度、清濁併せ呑み、赤心を人の腹中に置いて疑はず、

筆蹟

相約投淵無
後先、豈圖波
上再生絲。
回、頭十有餘
年夢、空隔
幽明一哭、墓
前。
月照和尙忌日
賦。南洲。

談笑して天下の勢を制し、國家を磐石の安きに置いたのは、彼の西郷南洲であつた。木戸の識、大久保の斷、西郷の量、三

(刻所神念記盛隆郷西) 蹟筆盛隆郷西

者相俟つて此に天地を旋轉するやうな大業が成就せられたのであつて、世に維新の三傑と稱するも亦偶然でないのである。當時彼等三傑が同心戮力して經國の大業を建て

筆蹟

戊辰進擊日、三月十五日、
蝸牛角上鬪、轉瞬廿五年、
皇國一大府、此中無幸民、
如何爲、焦土、思之獨傷神、
八萬幕府士、罵我爲「天奸」、
知否奉天策、今見全都安、
嗚呼殺全都空、我有「濟野術」、
傲「管仲」那翁、官兵逼「城日」、
知「我唯南洲」、一朝「機事」、
百萬元「調機」、壬辰初夏、
海舟勝安芳。

つゝあつた時に、他の一面に於ては、奇傑勝海舟の如きがあつて、よく時艱を濟つたのであつた。海舟人となり、雋異卓

戊辰進撃日、三月十五日、
皇國一大府、此中無幸民、
如何爲、焦土、思之獨傷神、
八萬幕府士、罵我爲「天奸」、
知否奉天策、今見全都安、
嗚呼殺全都空、我有「濟野術」、
傲「管仲」那翁、官兵逼「城日」、
知「我唯南洲」、一朝「機事」、
百萬元「調機」、壬辰初夏、
海舟勝安芳。

(觀大畫書) 蹟筆芳安勝

拔其の炯々たる眼識はよく時局を大觀し、機略縱横、死生の境を行くこと平地の如く、終に幕府をして恭順の實を擧げ

しめ、生民をして塗炭の苦を免れしめたのであつた。

維新前後は我が偉大なる國民精神の最も著しく發揮せられた時で、偉人傑士の風雲に乗じて起つたものは甚だ多かつたのであるが、就中海舟南洲の如きは、高山峻嶽の巍々として雲表に聳ゆるが如く、嶄然として頭角を現したものであつて、若し此等の人がなかつたならば、維新回天の事業も斯く速に圓滿なる成功を告げることが出来なかつたであらうと疑はれるほどである。我が國民が明治の初年に於て、早くも上下心を一にして盛に經綸を行ふといふ國是に従ひ、世界の競争場裡に進んで大いに國勢を張ることを得たのは、實に此等偉人の賜であつて、吾人國民が景慕の情を

傾けて、之が傳を立て、之が像を掲げ、彼等の墓門既に苔むせる今日、彼等が猶吾人の中に活き、吾人を導いて居るやうに思はれるのも意味のあることである。

猶吾人が想を馳せて維新前に國難に殉じた多數の志士を追懐すると、其の奉公の赤誠、敢爲の志氣、轉吾人をして感慨に堪へざらしむるが中にも、吉田松陰、橋本景岳の如きは、最も強く吾人の注意を惹くのである。

西郷南洲は常に「余は先輩に於ては藤田東湖に服し、同輩に於ては橋本左内を推す。二子の才學器識はとても吾が輩の及ぶ所でない」といつた。時に南洲は三十歳、景岳は二十三歳の齡であつた事を思ふと、景岳は我が國の青年偉人中に最も卓越せる者と

いはねばならぬ。かれ叡智靈覺涌くが如く、早くも國家の大計に着眼し、一青年の身を以て、政界の大波瀾の中に手腕を試みたのであつた。彼は不幸にして二十六歳を一期と

筆蹟
有感
遺却功名萬
念休、渾將
心事、附
悠、自聞
悠、自聞
故
舊沈淪、慳
短
笛清、砧別
有
秋。

有感
遺却功名萬念休
渾將心事附悠、自聞
故舊沈淪慳短笛
清砧別有秋

讀筆内左本橋
(帖芳遺士志新維藏緘藤加)

して刑場の露と消えたけれども、彼の志は南洲等の知己に依つて成就せられた。吉田松陰も三十歳の短生涯を以て非命の死を遂げたけれども、彼の人格は永久に國士の典型として青史を照して居る。忠愛の至誠、英發の志氣、大義の

身を殺して
子曰、志士仁
人無求生以
害仁、有殺
身以成仁。
論語。

五人の大臣
伊藤博文。
山縣有朋。
山田顯義。
品川彌次郎。
野村 靖。

存する所は水火をも避けず、身を殺して仁をなすといふ志士の本領は、彼に於て最もよく見ることが出来る。彼が一小私塾の教育に盡した熱誠は、幾多の志士を輩出して王政維新の急先鋒とならしめ、明治の御代になつてからも五人の大臣を出した位であつた。吾人は松陰、景岳に依つて英偉なる人物が少壯期に於て既にかくも貴き事を爲し得るを知ると共に、感歎の情に堪へないのである。

二 偉人 その二

嘉納治五郎

かく吾人は明治昭代の起因を尋ねて、幾多の偉人に景仰の情を傾け、感謝の意を表すると共に、此等の偉人の後を受け

て我が國の將來を經營すべき少壯國民の任務の重大なるに想ひ到らざるを得ないのである。少壯國民にして自家の任務の重大なるを知る者は、又よく此等の偉人を學んで其の先蹤を繼ぐことを務めねばならぬ。頼山陽は十四歳の少時に、

十有三春秋、逝者已如水。天地無始終、
人生有生死。安得類古人、千載列青史。

と歌つた。古來の偉人が少年青年の時よりして漸く發達した逕路を尋ねると、多くは前代の偉人を景仰して、感憤興起したのに基ついて居るのである。偉人を景仰するのは青年自然の情であつて、此の情の生ぜぬものは、其の志多く

聖人は百世の師
孟子曰、聖人百世之師也。

は低劣で、其の行亦多くは鄙陋である。吾人は前偉人に活理想を求めて、此に志氣を振ふことが出来るのである。志氣が振つて、此に向上發展の途に就くのである。固より、古來偉人の人格には、おのづからにして卓越したのもある。偉人の事業には、時代の大勢が與つて其の背後の力となつて居るものもある。それで偉人を學ぶものが、誰も皆偉人となり得るといふことは難い。併し偉人を學ぶことに依つて、天才ある者は益之を英偉に發揮することが出来、凡庸なものも其の人として最高度の發展を爲し得るのである。孟子は、聖人は百世の師なり。伯夷、柳下惠はなり。故に伯夷の風を聞く者は、頑夫も廉に、懦夫も志を立

伯夷柳下惠是也。故聞伯夷之風者頑夫廉懦夫有立。志聞柳下惠之風者薄夫敦鄙夫寬柔乎百世之上。百世之下聞者莫不興起也。非聖人而能若是乎。而況於親炙之者乎。

つるあり。柳下惠の風を聞く者は、薄夫も敦く、鄙夫も寛なり。百世の上に奮ふ。百世の下、聞く者興起せざるなし。と云つた。偉人を學ぶべき者は、獨り偉人には限らない。懦夫も鄙夫も、皆偉人に依つて鼓舞せられ、激勵せられ、感化せられ、指導せられ、以て向上の生活に進むのである。且古來凡庸を以て嘲られ、微賤を以て輕んぜられたものが、他日巍々として衆目を驚かすやうな發展を爲し得た事が少からず、史上に存するのを思ふと、今日不幸な境遇に生活し、凡庸愚劣と評せられて居るものも、決して失望自棄するを要しないのである。前に列舉した維新前後の六偉人の如きも、何れも皆微祿の士であつた。南洲特に海舟の如き

は眞に赤貧洗ふが如きものであつた。松陰・景岳の如きは、生來虚弱多病であつた。南洲の如きは少時極めて魯鈍といはれたものである。松菊・甲東の如きも、少時は意氣の壯なのみで、特に英才の煥發したわけではなかつた。若し彼等が精勵刻苦して勳功を建つるに及ばず、不幸にして夭折したならば、青年偉人として後世に傳へらるべきことは何もなかつたであらう。此等のことを思ふと、「我も人なり、彼も人なり」といふ思想は、決して僭越狂妄として排斥すべきではない。

「王侯將相寧種あらんや」といひ、英俊とは凡常の士の發憤勉勵したるものゝみ」といつたのも無理ではない。顔淵は「舜

王侯將相
壯士不、死即
已。死即豈大
名一耳。王侯將
相寧有種乎。
史記。

何人ぞ、予何人ぞ」といつた。有爲の士の志を立つることは常に此の如きものである。

今や我が國は世界の日本として大活動大發展を爲すべき時に臨んでゐる、公私各般の事業に於て英偉なる人物を要することは甚だ急なのである。今日の多數青年の中、誰かよく前英に續ぎ、來者に先だつて大業をなすであらうか。偉人を師として奮起するは終生の最大快事であつて、假令運命は其の人をして偉人の名を成さしむるに至らずとも、我として最高の發展を爲し遂ぐることを得たならば、人生の目的は此に達せられたと謂ふべきではあるまいか。

(青年修養訓)

姪

吉田松陰の長
妹千代子。
この文は安政
六年四月十三
日松陰が萩の
野山の獄に在
りて千代子に
贈りしものな
り。

吉田松陰
名は寅次郎。
長門藩の勤王
家。
教育家。
安政六年(三三
三)斬らる年三
十。

三 妹にさとす

吉田 松陰

この間は御文下され、観音様の御洗米、三日の精進にていたゞき候やうとの御事、御深切の御志感じ入り申候。精進、潔齋などは、随分心のかたまり候ものにてよろしき事と存候につき拙者も二月二十五日より三月晦日まで少々志の候へば、酒肴ども一向たべ申さず候。その間、一度靈神様御祭のもの頂戴致候ばかりに御座候。まして三日の精進はさまでむづかしき事にもこれなく、御深切の事に候へば相果したく存候へども、當所にては、あたりまへの精進の外にまた精進と申候うては、

連中又は番人ども何故と怪しみ尋ね候につき、それをそれと相答へ候事面倒に存候故、八日よりさいはひ精進日なれば、その日一日に戴き申候。

そも、観音様信仰せよとの事は定めし禍をよけ候ためなるべく、これには大いに論のある事に候へば、委細申進すべく候。法華經第二十五の卷普門品と申すに、観音力と申す事高大に述べてこれあり候。大意は、観音を念じ候へば、繩目にかゝり候へば忽ちぶつくと繩が切れ、人屋へ捕はれ候へば忽ち錠、鍵がはづれ、首の座へ直り候へば忽ち刀がちんちに折るゝなど申してこれあり候。これは拙者江戸の人屋にてこの經は、

ちんち
方言、微塵な
どの意。

幾度も繰返し讀みて見候へども始終この趣に候。それ故凡人はこれよりありがたき事はなしとて信仰するも無理はなく候。さりながら、佛の教は奇妙なる仕懸にて、大乘・小乗と二つに分ちて、小乗は下根の人への教、大乘は上根の人への教と定めこれあり候。小乗にて申候へば觀音は右の經文の通のものと心得、ひたもの信仰せしむることに御座候。これは人に信をおこさするためなり。信を起すとは一心にありがたい事ぢやとのみ思ひ込み、餘念他慮なきことにて一心不亂と申すもこの事なり。人は一心不亂になりだにせば何事に臨み候うてもち

一 士道莫大於義我因循行
因義長
一 士行以質實不欺為要以巧詐文過為恥光明正大皆由是出
一 成德達材師恩友益甚多
百故君子慎交游
一 死而後已四字言簡而義該堅忍果決確乎不可拔者舍是無術也

三才圖會士流

(内の則七規士) 蹟筆陰松田吉

つとも頓着なく繩目も人屋も首の座も平氣になられ候ゆゑ世の中に如何に難題苦患の來るとも、それに退轉して不忠不孝無禮無道等仕る氣遣ひはなし。されど初より凡夫に、一心不亂ぢやの不退轉ぢやのと申しきかせても少し

都上り
法華經第七化
城喻品。

天竺王
迦比羅城主淨
飯王。

も耳に入らぬもの故に、かりに観音様を拵へて人の信
を起させ候教に御座候。之を方便とも申候。これに
つきて、法華經に都上りの喩これあり至極面白く候へ
ども、事長ければ略し申候。

さてまた大乘と申す方にては出世法と申す事が肝要
に御座候。出世と申候うても、立身出世など申す事に
は御座なく候。その初は、釋迦が天竺王の若殿に候ひ
し處、若き時より感の強き人にて、老人を見ては我が身
も往くさきは老人にならんかと悲しみ、死人を見ては
我が身も往くさきは死なんかと悲しみ、蟲けらの死に
たる草木の枯れたるまでに悲を發し、生老病死がこの

世の習なれば、是非にこの世を出ねばすまずと志を立
て、年二十五の時位を棄て、山に入り、右の生老病死
を免るゝ修行をしに參られ候。(これにも色々有難き話があ
れども、事長ければ略す。)
さ候うて三十出山とて、わづか五年の間に生老病死を
免るゝ事を悟り、生れもせねば老いもせず、病みも死に
もせぬ事を悟つて出て来て、それより世の人を教化せ
られたり。これが即ち出世法なり。故に、出世せねば
濟世の出來ぬと申すもこの事なり。濟世といふは、即
ちこの世の人を濟度することに御座候。
さてその死なずと申すは、近く申さば釋迦の孔子のと
申す方々は、今日まで生きて居らるゝ故人が尊みもす

人間萬事
淮南子に見ゆ。

ればありがたがりもし、畏れもするなり。果して死なぬに候はずや。(孔子の教もやはりこの通に候へども事長し略す。) 死なぬ人なれば、繩目も人屋も首の座も、前申す観音經の通には候はずや。楠木正成とか大石良雄とか申す人は刃ものに身を失はれ候へども、今以て生きて居らるゝなり。即ち刀のちんちに折れたる證據なり。さてまた「禍福繩の如し」といふ事を御悟なるが宜しく候。禍が福の種、福が禍の種に候。人間萬事塞翁が馬に御座候。(このわけは物知に問うて知るべし。) 拙者など人屋にて死ぬる事に候へば禍のやうなるものに候へども、また一方には學問も出來、己のため、人のため、後の世へも残り、かつ

易の道

天道虧、盈而
益謙。
七人兄弟
杉民治
吉田寅次郎
杉千代子
兄玉兵衛門
妻
杉壽子
小田村素太
耶妻
杉艶子
杉美和子
久坂義助妻
杉敏三郎
ふさま
方言、運の意。

がつ死なぬ人々の仲間入も出來候へば、福この上もなき事に候。人屋を出て候へば、又如何なる禍の來んも知れ申さず候。勿論、その禍の中にはまた福も交り候へども、所詮一生の間難儀だにせば、先には福あるべし、何の効驗もなき事に、観音に頼みて福を求むるやうの事は、必ずく、無益に存候。尤も右の通に申候へば、身勝手なる申分、不孝なる申條と御存あるべきか、こゝにまた論あり。易の道は満盈と申すことを大いにきらふなり。御互に七人兄弟の内、拙者は罪人、艶は夭折、敏は啞子、ふさまのわるきやうなるものなれど、あと四人は何れも可なりに世を渡ら

れ、特に兄様。そもじ。小田村は兩人づつも子供があれば不足は申されず。世の中の六七人も兄弟のある家を見くらべよ。是程にも參らぬ家は多きものぞ。近くはそもじの家にては、高須などにては、兄弟の内にはふさまのわるき人も随分あるなり。然れば父母兄弟の代りに拙者、艶敏の三人が禍を引受くるにこそと思ひ候はゞ、父母様の御心も濟まるゝ譯には候はずや。且杉は随分多福の家なれば、拙者の身の上よりは、却て杉が氣遣なるものなり。拙者身の上は前に申す通、つめが牢死、牢死しても死なぬ仲間なれば、後世の福は随分あれど、杉は今にては御父子とも御役にて何の不足も

山宅

杉常道隠棲の地。萩城の東方護國山麓に在り。

小太郎
兄民治の子

なき中なれば子供等がいつもこの様なるものと思ひて、昔山宅にて父様、母様の晝夜御苦勞なされたる事を話して聞かせても眞とは思はぬ程なれば、この先、五十年七十年の事をとくと手を組んで案じて見られよ、氣遣なる者にては候はずや。去年も端午に客の多きを人はめでたしくと嬉しき顔をすれど、拙者は何分先の先が氣遣にてたまらぬゆる、始終稽古場に屈みて、人の知らぬ處にては獨り落涙したる程の事なりき。もしや、萬一、小太郎が父祖に似ぬやうなる事あらば、杉の家も危しく、父母様の御苦勞を知つて居るもの、兄弟にてもそもじまでぞ。小田村にてすら山宅の事

はよくは覺えて居るまじ。まして久坂などは猶以てのこと。されば拙者の氣遣に觀音様を念ずるよりは、兄弟甥姪の間に「樂は苦の種、福は禍の本」と申す事をとくと申聞かする方が肝要なり。
なほまた一つ、拙者不孝ながら孝に當ることあり。兄弟のうち一人にてもふさまのわろき人あれば、あとの兄弟は自然と心が和ぎて孝行するやうになり、兄弟も睦まじくなるものなり。これより拙者は兄弟の代りにこの世の禍を受合ふゆゑ、兄弟中は拙者のかはりに父母様に孝行してくるゝがよし。さすれば、つゞまるところ兄弟中皆よくなりて、はては父母様の御仕合

せ、また子供が見習ひ候へば、子孫のためこれ程めでたき事はなきにあらずや。よくよく御勘辨候うて、小田村、久坂なんどもこの文御見せ、佛法信仰はよき事なれど佛法に迷はぬやうに、心學本なりとをりよく御見候へかし。心學本に、
のどけさよ、ねがひなき身の神まうで。
神へ願ふよりは身に行ふがよろしく候。(俗簡禪輯)

四 擣衣

清水濱臣

近しと聞けば遠し、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむもまたしきる。かりがねの聲の砧を誘ふにやあらん

清水濱臣
國學者。
通稱玄長。
泊酒舎と號す。
文化七年(三)宅
三歿す年四十
九。

砧の音のかりがねに通ふにやあらんあなあやし、く、そ

水清
清の水をみるに
あなあやし、く、そ

蹟筆巨濱水清
(観大畫書)

もこの音の悲しきか、住む里の淋しきか、打つ折の憂き故か。
みなあらず。きく人の心のさびしきなり。(泊酒舎集)

伴蒿蹊

五里祭

伴 蒿 蹊

國學者。
名は資芳。
文化三年(西
曆)没す年七十
四

葉月・長月は田舎の神祭多かり。今年は別きて二百十日二
十日とて恐るゝ風の煩もなく、早稲は疾く刈りはて、中稲・晚
稲すぎくにあからむ。足穂の心ゆくに賑ひまさりて、ふ

家々醉人を
鵜湖山下稻梁
肥、豚糞雞埒
半掩、扉、桑柘
影斜秋社散、
家々共、得醉
人歸。社日。
王駕。

るびたる太鼓張りあらため、神主の烏帽子装束さらに調じ
など、新米の餅、新搾の神酒に鱮物干肴取並べたる神供まる
り、或は神樂の拍子のしどろなるを奏し、或は相撲してとよ
めくもあり。またさばかりの式だになくて、唯里長を始め
老いたるも若きも拜殿に打集ひ、酒に酔ひしれて珍しげな
きなりはひの物語を大聲に語りあふ樂しさを神わざなり
など思へるも見ゆ。こはなかく、賀茂祭のおほやけぶり、
祇園會のきらく、しきよりものどやかに、家々醉人を扶け
て歸る。と聞ゆる唐土の社日の様さへ通ひて、神も嬉しとみ
そなはし給ふらんかし。(閑田文章)

六 名物

名物を食ふが無筆の旅日記、
 千客萬來、皆來ると困るなり。
 轉寐の顔へ一冊屋根にふき。
 武者一人叱られてゐる土用干。
 本降になつて出てゆく雨やどり。
 抑へればすゝき、放せばきりぐす。
 よつびいてひようと放さぬ案山子かな。
 手の甲へ餅を受取るすゝはらひ。
 通りぬけ無用で通りぬけが知れ。
 泣くくも良い方を取る形見わけ。

近松門左衛門

戯曲作家。
 享保九年(一七二六)歿す年七十二。
 親子 鄭芝龍鄭成功父子。
 李蹈天 明朝に仕へて右軍の將となる。後、韃靼に内應して明帝を殺す。
 吳三桂 明朝の忠臣。仕へて司馬大將軍となる。

芭蕉は飛びこみ、道風は飛びあがり。
 釣れますかなどと文王そばへ寄り。

七 千里が竹 その一

近松門左衛門

船路の末も知らぬ火の筑紫は雲に埋めども、跡に擁護の神風や、千波萬波を押しきつて、時も違へず親子の船唐土の地につきにけり。鄭芝龍一官は故郷に歸る唐錦、裝束引換へ妻子に向ひ、我が本國といひながら、時移り、世變り、天下悉く李蹈天が引入れにて韃靼夷の奴となり、昔の朋友一族とて誰を尋ねん様もなく、司馬將軍吳三桂が生死の様子も知らざれば、何を以て義兵の旗をあげ何處の一城に立て籠るべ

娘の子
錦祥女。

吳將軍甘輝
明の將軍。後
魏祖に降りし
が、幾ならず
して又之に叛
き鄭芝龍に應
ぜり。

き處もなし。然るに某去んぬる天啓五年、この國を立ちの
き、日本へ渡る時、二歳になりし娘の子を乳母の袖に捨置き
しが、その子が母はうみ落して當座に死す。かくいふ父は
八重の汐路の中絶えて、いつ父母も知らぬ身が、育てば育つ
草木の雨露の恵に長ずる如く、天地の父母の助にや、成人し
て、今吳將軍甘輝といふ大名、一城の主の妻となりし由、商人
の便に聞及ぶ。頼む方はこればかり。親を慕ふ心あつて
娘さへ承引せば、聳の甘輝も安々と頼まるべし。これより
道の程百八十里、連れては人も怪しまん。われ一人道をか
へ、和藤内は母を具し、日本の漁船の吹流されしと頓智を以
て人家に憩ひ、追附くべし。これより先は音に聞ゆる千里

が竹とて虎の栖む大藪あり。それを過ぐれば潯陽の江。
これ猩々の栖む處。風景聳えし高山は赤壁とて、昔東坡が



近松門左衛門

配所ぞや。それよりは
甘輝が在城獅子が城へ
は程もなし。その赤壁
にて待捕へ、萬事を示し
合すべし。ど、方角とても
しら雲の日影を心おほ
えにて、東西へこそ別れ

けれ。
教に任せ、和藤内、人家を求め忍ばんとかひなく、しう母を負

ひ、たづきも知らぬ岩巖石、古木の根ぎし瀧つ波、飛びこえ跳ねこえ飛鳥の如く急げども、末はてしなき大明山、人里絶えて廣々たる千里が竹に迷ひ入る。和藤内ほうと我をぬかし、「のう母ぢや人、この腰骨に覺えたり、もう四五十里も來ませうが、人にも猿にも逢ふことか、行けば行く程藪の中。むう、わかつたり、方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶるよな。魅さば魅せ。宿なし旅の行きつき次第、小豆の飯の相伴」と根笹、大竹押分け、踏分け、猶奥深く行くさきに、怪しや數萬の人の聲。攻鼓、攻太鼓、喇叭、ちやるめら、高音をそらし、ひようくとこそ聞えけれ。「すは、我々を見咎めて、敵の取巻く攻太鼓か、又は狐のなすわざか」と茫然たるその折節、空凄しく風起

虎嘯けば
虎嘯谷風起龍
興景雲浮
楊香
晉の人。赤手
虎を搏して父
の危を救ふ。

り、砂を穿ち、どうくく、竹葉さつと卷立て、卷立て、吹折る竹は劍の如く、凄じなんどもおろかなり。和藤内ちつとも臆せず、讀めたり、さては異國の虎狩なり。あの鐘、太鼓は勢子の者。こゝは聞ゆる千里が竹。虎嘯けば風起る。猛獸の所爲と覺えたり。二十四孝の楊香は孝行の徳に因つて自然と逃れし悪虎の難。その孝行には劣るとも忠義に勇むわが勇力。唐へ渡つて力始め、神力ますます日本力、刃で向ふは大人氣なし、虎はおろか、象でも鬼でも一挫ぎと、尻ひつからげ、身繕ひ、母をかこうて立つたるは西天の獅子王も畏れつへうぞ見えてける。案に違はず吹く風と共に暴れたる猛虎のかたち、藤根に面

をすりつけすりつけ、岩角に爪磨ぎ立て、二人を目がけい
み懸るを事ともせず、弓手に擲り、馬手に受け、振つて懸れば
身をかはし、撓めばひらりと乗移り、上になり下になり、命競
べ根競べ、聲を力にえい／＼／＼、虎の怒り毛、怒り聲、山も崩
るゝごとくなり。和藤内も大童、虎も半分毛を筆られ、兩方
共に息つかれ、石上に突つ立てば、虎も岩間に小首を投げ、大
息ついたるその響、輔吹くが如くなり。
母藪蔭より走りいで、やあ／＼、和藤内、神國に生れて神より
受けし身體、髮膚、畜類に出であひ力立てして怪我するな。
日本の地は離るとも、神はわが身にいすゝ川、大神宮の御祓、
納受などか無からんや。」と、肌の守を渡さるれば、「げに尤も。」と

押戴き、虎に差向け差上ぐれば、神國神祕のその不思議、猛り
に猛る勢も、忽ち尾を伏せ耳を垂れ、じり／＼／＼と四足を縮
め恐れわな／＼き、岩洞に匿れ入る。をづつを攫んで跳ね返
し、打伏せ打伏せ、ひるむ所を乗つ懸り、足下にしつかと踏ま
へしは、天の斑駒、素戔鳴尊の神力、天照らす神の威徳ぞ有難
き。

八 千里が竹 その二

近松門左衛門

かゝる所に勢子のももの群がり来るその中に、大將と覺しき
者大音揚げ、やあ／＼うぬはいづくの風來人、我が高名を妨
ぐる。その虎は忝くも主君右將軍李踏天より韃靼王へ獻

上のため狩出したるものなるぞ。早々渡せ。異議に及ばば打殺さん。じやくはん、じやくはん。」とぞわめきける。李蹈天と聞くよりも願ふ所と笑壺に入り、「やあ、餓鬼も人数しをらしい事ほざいたり。身が生國は大日本。風來とは舌長し。さほど欲しがらる虎ならば、主君と頼む李蹈天とやら、石花菜とやら、こゝへつき出し、詫言させい。直に逢うて用もある。さもないうちには、いつかな事ならぬ、ならぬ。」とねめつくる。「やあ、物ないはせそ。打取れ。」と、一度に劍をばらりと抜く。「心得たり。」と護符を虎の首にかけ、母の側にみつすうれば、繋ぎしごとくにはたらかず。「おゝ、心易し。」と太刀差翳し、群がる中へ割つて入り、八方無盡に割りたて割りたて

撫でまくる。

勢子の大将安大人、官人引具し立歸り、「おのれ老耄餘さじ。」と一文字に切りかゝる。猶も神明擁護の驗、神力虎に加つてむつくと起きて身慄し、敵に向ひ齒を鳴らし、猛りうなりて飛蒐る。「こは叶はじ。」と安大人、勢子の差いたる劍、かり鉾、數槍、手にあたるを幸に、投附け投附け打ちかゝる。虎は神力自在を得、劍を宙に引つ喰へ、岩に投げあて微塵になす。双の光玉散る霰、氷を碎くに異ならず。双物盡くれば、官人ども、色めき立つて逃げ迷ふ。後より和藤内、「どつこい遣らぬ。」と顯れいで、安大人が素首を擱んでさじ上げ、くるくると振りまはし、えいやつと打ちつくれば、岩に熟柿を打つ如く、五

體ひしげて失せにける。

此の勢に官人原後へ戻れば、悪虎の口先へ行けば和藤内、仁王立に突つたちたり。「あゝ、申し御堪忍、御免御免。」と手を合せ、土に喰ひつき泣きゐたり。和藤内虎の背を撫で、「うぬらが小國とて侮る日本人、虎さへこはがる日本の手練を覺えたか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍老一官が悴、九州平戸に生長せし和藤内とは我が事なり。先帝の妹宮、梅檀皇女に巡り逢ひ、三世の恩を報ぜん爲、父が故郷へ立歸り、國の亂を治むるなり。」さあ、命惜しくば味方につけ。否といへば虎の餌食。否か、應か。とつめかくる。「喃、何の否で御座りませう。韃靼王に従ふも、李蹈天に従ふも、命が惜しさ。向後お

前の御家來ども、お情頼み奉る。」と地に鼻つけて畏まる。

「おゝ、でかした、でかした。さりながら我が家來になるからは、日本流に月代剃つて元服させ、名も改めて召使はん。」と、指添の小刀外させ、是も當座の早剃刀、母も手々に受取つて、並ぶ頭の鉢の水、揉むや揉まずに無理無體、片端そるやらこぼつやら、絲鬢、厚鬢、剃刀次第、瞬くひまに剃りしまひ、二櫛半のばらけ髪、頭は日本、髭は韃靼、身は唐人、互に顔を見合せて頭ひやつく風引いて、「くっさめく、村雨々々。」と、涙を流すぞ道理なる。

親子どつと打笑ひ、「揃ひも揃うた供廻り名も日本に改めて河左衛門、何兵衛、太郎次郎、十郎まで、面々國所頭字に名乗り

二行に立つてぼつたてろ。「承り候」とお先手の手振の衆ちやくちう左衛門・東蒲塞右衛門・呂宋兵衛・東京兵衛・遠羅太郎・占城次郎ちやるなん四郎ほるなん五郎うんすん六郎すん吉郎もうる左衛門ちやが太郎兵衛さんとめ八郎英吉利兵衛今參のお供先あとに引馬虎斑の駒母を助けて孝行の名を取る、口取る國を取る。譽は異國本朝に蹈み跨げたる鞍鐙、虎の背中に打乗つて、威勢を千里に顯せり。(國姓爺合戦)

徳富健次郎

蘆花と號す。
文學者。
明治元年生。

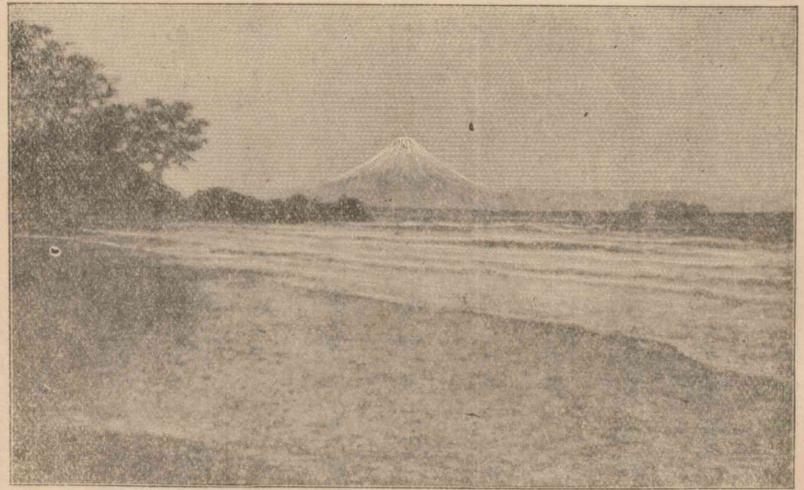
九 相模灘の落日

徳富健次郎

秋冬、風全く風ぎ、天に一片の雲なき夕べ、立つて伊豆の山に落つる日を望むに、世にかゝる平和のまた多かるべしとも

思はれず。

日の山に落ちかゝりてより其の全く沈み了るまで三分時を要す。日の西に傾くや、富士を始め相豆の連山煙の如く淡し。日は謂はゆる白日、白光爛として眩し。日更に傾くや、富士を始め相豆の連山次第に紫になるなり。日更に傾くや、富士を始め相豆の連山、紫の肌に金煙を帶ぶ。此の時、濱に立つて望めば、落日海に流れて吾が足下に到り、海上の舟は皆金光を放ち、逗子の濱一帯、山と云はず砂と云はず、家と云はず、松と云はず、人と云はず、轉りたる生簀の籠も、落ち散りたる藁屑も、赫焉として燃えざるはなし。かゝる風の夕に落日を見る身は、恰も大聖の臨終に侍する



相模灘を隔てて富士山を望む

感あり。莊嚴の極、平和の至、凡夫も靈光に包まれて肉融け、靈獨り端然として永遠の濱にイむを覺ゆ。物あり、融然として心に浸む。喜と云はんは過ぎ、哀れと云はんは未だ及ばず。已にして日愈落ちて伊豆の山にかゝるや、相豆の山忽ちにして印度藍色に變ず。唯富士の嶺舊に仍つて紫の上に更に金光を帶ぶるのみ。伊豆の山已

に落日を銜み始めぬ。日一分を落つれば、海に浮べる落日の影一里を退く。日は迫らず、分又分、寸又寸、別れ行く世をば顧みがちに悠々として落ちて行く。已にして残り一分となるや、急に落ちて眉となり、眉切れて線となり、線瘖せて點となり、忽ちにして無し。眼を上ぐれば世界に日なし。光消えて、海も山も蒼然として憂ふ。日は入りぬ。然も餘光の忽ち箭の如く上射し、西の空、金よりも黄なるを見ずや。偉人の歿せる後、實にかくの如し。日の落ちたる後は、富士も程なく蒼ざめ、やがて西空の金は朱となり、燻りたる樺となり、上りては濃きプロシア藍色となり、日の遺骸とも思はるゝ明星の次第に暮れ行く相模灘

の上に眼を開きて明日の出日を約するが如きを見るなり。

(自然と人生)

與謝野晶子

與謝野寛の妻

歌人。

明治十一年

生。

一〇 室内の花

與謝野晶子

私は室内に花を缺きたくない。殊に冬は温室から出されたいろくの花を書齋に置きたい。他の季節には屋外に花を観ることが出来る。それでも猶私は室内に花の活けて無い日は味氣ない氣がする。私の心持の延長が内から中絶し、若くは外から抑壓された氣がする。私が花を愛するのは物質的の愛で無くて、私の熱情や理性や意志の延長した一つの様式と見て愛するのである。私の室内にある花

は私の像である。私の詩である。私の純粹の愛である。私と内面的に繋つて居る一體の物である。私は花に對してかう直感して、さうして、どの花とも清い心靈の接吻を取りかはして居る。

私は花に對して好き嫌ひがある。その醜いものは私の内にある醜いものを正視する氣で憎む。それと同時に、その醜いものゝ中にも出来るだけ美點を探り出さうとする。此の事は大抵の場合に徒勞で無い。美は凡ての物にある。全體に無ければ部分にある。線に無ければ色にあり、姿にある。花に無ければ香に、莖に、枝に、葉に、果實にある。私は嫌ひな花を必ずしも棄てない。嫌ひな部分と好きな

部分との繋がつて居る二律相反アンチフェイスにも一種の悲しい感情の湧くのを喜ばずに居られない。例へば牡丹は花も葉も莖も好いのに香が苦愁を湛へて居る。また梅は花に比べて枝がぎこちなく、刺さへもある。其等の對照に私は心を惹かれる。牡丹を見て單に花と葉と莖とを愛するのは淺い。その苦く、重く、あくどい香りを以て比較され強調されて居る花と葉と莖とを愛することが牡丹を眞に深く愛することである。刺のある槎牙たる枝から反對に美しい情調を以て咲いて居る花を愛することが眞に深く梅の花を愛することである。薊の花などに就いても同じことが思はれる。

それから私はよく、花が無いと、白枯しほれた寒菊の花をさへ活けて置く。これは決して艶なものでも美しいものでもない。美の痛ましき醜みにくの殘骸ざんがいである。私が之を活けて置く心理は之を對照として私の心の中にある若き華やかさ、強さのいろ／＼を燃え上らさう、引立てよう、力づけようとして居るのである。丁度戯曲の中に現れる醜と悪が美と善とを引立てるやうに。

私は此の頃の花屋にある花では寒牡丹、薔薇、カーネーション、紅梅、茶の花、狸々木を特に好く。水仙は支那趣味の高い爲に、椿は道學的にかつく堅苦しいために、猫柳は花で無くて動物の毛の感じを與へたるために、南天、燭、萬兩、福壽草

の類は俗臭のために、私は何れも大して愛することが出来ない。言ひ換へれば其等の花卉に私の感情を移入して私の内心の一つの像とするには、それを反撥するものを其等の花卉が餘計に持つて居て、私と快く一體になることを妨げるのである。

私は花を活けるのは一定の法に依ることを好まない。挿花法は花を殺すもの、花を活ける人自身の心を殺すものだと思つて居る。花を活ける人は花を愛せよ、愛する花を活けよ。愛には法も型も無い、たゞ眞實と誠意と熱情とがあるばかり。私は花を活けるのにたゞ投込んで置く。その時の私の自然の心持に随つて正直に投込んで置く。ロダ

ロダン
佛國の彫刻家
(1840-)

ンはモデル女に自由に跳ねたり踊つたりさせて置いて、其の不用意の中に現れる自然の美と眞實との力を捉へるのであつた。私は活けようとする花の上に私自身の心持を自由に跳ねたり踊つたりさせて置く。かうして投込まれた花は私の端的の像である。寫眞で現された、若しくは平凡な畫家の筆で現された表面的な像よりも、内面的の眞を傳へた私の像である。(若き友へ)

一一 光頼卿の參内

さる程に内裏には同じき十九日公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衛門督光頼卿この程は信頼卿の振舞過分なりと

十九日

二條天皇平治元年十二月。

信頼卿

左衛門督藤原信頼。父は忠隆。母は光頼の妹。

信賴
光賴
惟方
女
顯賴
藤原顯隆
顯長
長方

て、不參にておはしましけるが、參内して承らんとて殊に鮮かに束帶引繕ひ蒔繪の細太刀おとしやかに佩き給ひ、乳母子の桂右馬允範能に膚に腹卷着せ、雑色の装束にいでたせ、自然の事もあらば、人手に懸くな、汝が手に懸けて光賴が首をばいそぎ取れ。とて御身近く置き、その外、清げなる雑色四五人召具して、大軍陣を張りて處々門々を堅く守護しけるを事ともせず、さき高らかに追はせて入りたまへば、兵ども大いに恐れ奉り、弓を平め、矢をそばめて通し奉る。紫宸殿を経て、殿上をまはりて見たまへば、信賴卿一座して、その座の上、藤たち皆下にぞ着かれける。光賴卿は不思議のことかな。人はいかにふるまふとも、彼は右衛門督、我

宰相
宰相參議の
唐名、定員八
人。

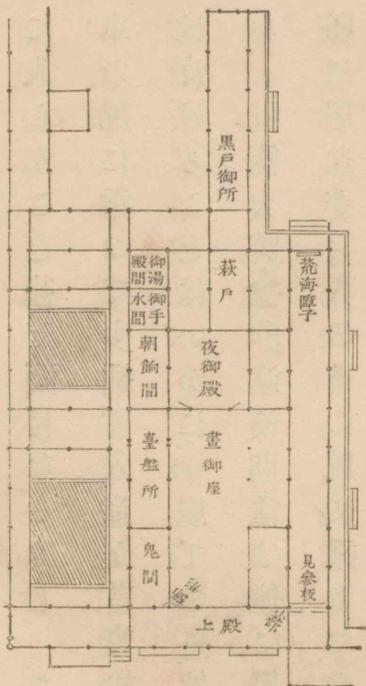
は左衛門督なれば、下には着くまじきものを、と思はれければ、左大辨宰相長方卿末座の宰相にておはしましけるに、今日の御座席こそよにしどけなう見え候へ。と色代して、しづと歩み、信賴卿の上にむすと着きたまふ。光賴卿は信賴卿のためには母方の叔父なる上、大力の剛の人なれば、ことに恐れて見えられたり。右の袖の上に居懸けられて、伏し目になりて色を失はれければ、着座の公卿、あなあさまし。と見たまふに、光賴卿下襲ねの尻引直し、衣紋繕ひ、笏取直し、氣色して、今日は衛府督が一座すると見えて候。召に參ぜざらんものをば死罪に行はるべしとやらん承りて、參内する所なり。抑、何事の御詮ぞ。と問ひけれども、信賴

十日
除目ありし翌日

頼光・頼信
共に多田源兵満仲の子。

卿ものも宣はず、着座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。程經て光頼卿つい立ちて「悪しう参つて候ひけり」とて、しづくくと歩みいでられけり。庭上にみちくたる兵ども、これを見奉りて「あはれ、この殿は大剛の人かな。去んぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に着く人一人もおはしませりつるに、しいだしたることよ。門を入り給ふより、聊かも臆したる體も見え給はず。あはれ、この人を大將として合戦せば、いかばかりか頼もしからん」と申せば、傍なるもの、「昔頼光・頼信とて源氏の名將おはしましき。その頼光をうち返して光頼と名のり給へば、これも剛にましますぞかし。」

といへば、また傍より「など、その頼信をうち返して信頼とつき給ふ右衛門督殿は、あれほど臆病にはおはしますぞ」といへば、「壁に耳、天に口」といふことあり。おそろし、おそろし。



(圖裏内) 殿 涼 清

聞かじ。といひながら、皆忍び笑ひに笑ひけり。光頼卿かやうにふるまひたまへども、

別當惟方
左兵衛督檢非違使別當藤原惟方。

急ぎても出でられず、殿上の小部の前、見參の板、高らかに踏鳴して立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩戸の邊に弟の別當惟方のおはしけるを招寄せ宣ひけるは、「公卿僉議とて

少納言入道
少納言藤原通
憲入道して信
西といふ。
神樂岡
洛東吉田神社
の邊に在り。

催されつる間、参じたれども、承り定めたる事もなし。誠や
らん、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承る
如きは、その人皆當時の有識、然るべき人ごもなり。その内
に入らんこと甚だ面目なるべし。さても先日、右衛門督が
車の尻に乗つて、少納言入道が首實檢のために神樂岡へ向
はれけることはいかに。以ての外、然るべからざる振舞か
な。近衛大將、檢非違使、別當は他に異なる重職なり。その
職に居ながら人の車の尻に乗りたまふこと、先蹤も未だ聞
及ばず、當時も大いに恥辱なり。就中、首實檢は甚だ穩便な
らず。」と宣へば、別當、「それは天氣にて候ひしかば」とて赤面
せられけり。

勸修寺内大臣

藤原高藤。
三條右大臣
高藤の子定
方。

切目
紀伊國日高郡
に在り。

光頼卿重ねて、「こはいかに、勅詔なればとて、いかで存ずる旨
を一議申さざるべき。我等が曩祖、勸修寺内大臣、三條右大
臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君既に十九代、臣又十一代。
承り行ふことは皆これ徳政なり、一度も悪事に従はず。當
家はさせる英雄にはあらざれども、偏に有道の臣に伴つて
讒佞の輩に與せざりしゆゑに、昔より今に至るまで人にさ
しもどかるゝ程の事はなかりしに、御邊始めて暴悪の臣に
語らはれて累家の佳名を失はんこと、口惜しかるべし。大
貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切目の宿より馳上るなる
が、和泉、紀伊、伊賀、伊勢の家人ら待ちうけて、大勢にてあなる。
信頼卿が語らふ所の兵そこばくならじ。平家の大勢押寄

せて攻めんには、時刻をや回らすべき。もし又火などをかけなば、君もいかでか安穩に渡らせたまふべき。灰燼の地となりたらんだにも、朝家の御歎なるべし。いかにいはんや、君臣共に自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡、この時にあるべし。右衛門督は御邊に大小事を申しあはすところを聞ゆれ。相構へてく、隙を伺ひ、玉體恙なくおはします様思案せらるべし。さて主上は何處におはしますぞ。」

「黒戸御所に。」上皇は、「一本御書所に。」内侍所は、「温明殿に。」劍璽は何處に。」夜の大殿に。」と左衛門督次第に尋ねたまひければ、別當かくぞ答へられける。

又朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ。」

と宣へば、それは右衛門督住み候へばその方様の女房などぞかけろひ候ふらん。」と申されければ、光頼卿聞きも敢へず、世の中は今ばかりござんなれ。主上の渡らせたまふべき朝餉には信頼住み、君をば黒戸御所に遷し参らせたり。末代なれども流石に日月は未だ地に落ちたまはぬものを、天照大神、正八幡宮は王法をいかゞ守りたまひぬるぞ。異國にはかやうの例ありと雖も、我が朝にて未だかくの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな。」とて、のろくしげに憚る所なく口説きたまへば、惟方は「人もや聞くらん。」と、よにすさまじげにて立たれけれども、且は悲しくて、「我いかなる宿業によつてかゝる世に生れ合ひ憂き事をのみ見聞くら

ん。昔の許由にあらねども今の内裏の有様を聞かん輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ」とて、上の衣の袖絞るばかり泣かれけり。信頼の座上に着かせられし時はさしもゆゝしく見えたまひしが、君の御事をかなしみて、うち萎れてぞ出でたまひける。(平治物語)

一二 佐那田餘一その一

兵衛佐殿
右兵衛輔佐源
頼朝。
大庭
大庭三郎景
親。
侯野
保野五郎景
久。
岡崎四郎
三浦大介義明
の弟。

兵衛佐殿仰に、「武藏相模に聞ゆる者どもは皆ありと覺ゆ。中にも大庭侯野兄弟先陣と見えたり。此等に誰をか組ますべき」と宣へば、岡崎四郎義實申しけるは、「弓矢を取つて戰場に出づる程の者、敵一人に組まぬ者やは侍るべき。親の

義忠
佐那田餘一義
忠。岡崎四郎
義實の子。

身にて申す事、人の嘲を顧みざるに似たれども、存ずる所を申さざらんも却て又私あるに似たるべし。義忠は此の間大事の所勞仕つて未だ力つかずや侍らめども、心しぶとき奴にて、弓箭取つては等倫に劣るべからず。其の器に侍り、仰せ含めらるべきか」と申しければ、やがて義忠を召してけり。餘一其の日の装束には、青地の錦の直垂に、赤緘の肩白の鎧の裾金物打つたるを着て、妻黒の箭負ひ、長覆輪の太刀を佩きけり。折烏帽子を引立て、弓を平め、跪きて將軍の前に平伏せり。白葦毛なる馬をぞ引かせたる。其の體あたりを拂つてぞ見えし。

兵衛佐、佐那田に宣ひけるは、「大庭・俣野は名ある奴原なり。今日の軍の先陣仕つて、彼等二人が間に組め、源氏の軍の手合なり、高名せよ。」とぞ宣ひける。餘一仰を蒙り、畏つて御前を立ち、郎等に文三家安と云ふ者を招き寄せて、義忠が母又子どもが母にも語るべしとて云ひけるは、「一昨日打出てしを最後と思ひ給ふべし。兵衛佐殿、今度の軍の先陣勤めよと直に仰せたびたれば、多くの人の中に擇ばれたる事、弓矢取る身の面目なり。されば命を限に戦はんずれば、生きて再び歸る事よもあらじ。豫て斯くと知り侍らば、何事も申し置くべかりけり。其の事今は力無し。我討たれぬと聞き給ひなば、母御前の御歎こそ思ひ残し奉れ。縦ひ我死し

岡崎・佐那田
共に相模國中
郡にあり。

たりとも、世の靜まらん程は、二人の稚き者をば如何ならん野の末山の奥にも隠し置きて、佐殿の世に立ち給うたらん時、先祖なれば岡崎と佐那田とをば申し賜はりて、兄弟に知らせてたび候へ。さては女房も子供が後見しておはしませ。佛に花香進らせて後の世弔ひ給へ。父岡崎殿も佐殿の御供なれば、軍の習生死を知らず、女性は何事か有るべきなれば、斯く申置くなり。」と慥に云ひ傳ふべし。又汝も稚き者ども不便に育て、世にあらば憑め、世になくば憫みて義忠が形見とも思へ。」など云ひければ、文三申しけるは、「殿の二歳の時より、家安親代となつて、夜は胸にかゝへ奉つて夜もすがら勞り、晝は肩にのせ日ねもすに育み奉る。早く成人し

給うて、人に勝れ給はん事を願ひき。五六歳になり給ひしかば、竹の小弓に小竹^{ササ}短^ミの矢、的草鹿、兎こそ射れ角こそ射れ、馬に乗つては兎こそ馳すれ角こそ馳すれと教へ育て奉りぬ。殿は今年二十五、家安五十七に罷成る。若き人だに主命とて先陣を蒐けて死なんと宣ふ。殿を見捨て、家安が生残りては何かせん。又人の言はん事こそ恥しけれ、佐那田餘一の最期には恥ある郎等身に副はず。文三家安が如何程命を生きんとてか最期の軍に主を捨て、逃げたりけん。と申さん事も口惜し。死なば一所の討死なり。左様の事をば誰にも仰せられよかし。とて三郎丸といふ童を招き寄せ、申含めて遣はしけり。

三浦介義明
相模、名族。
源頼朝の功臣。三浦郡衣笠城に戦死す年八十九。

餘一既に打出でければ、佐殿は「義忠が装束毛早に見ゆ、着替へよかし。」と宣へば、餘一は「弓矢取る身の晴振舞軍場に過ぎたる事候まじ、尤も願ふ所に侍り。」とて、十五騎の勢を相具して進み出でて申しけるは、「源氏世を取り給ふべき軍の先陣承つて、蒐出でたるを誰とか思ふ。音にも聞くらん、目にも見よ、三浦介義明の弟に、本は三浦悪四郎、今は岡崎四郎義實、其の嫡子に佐那田餘一義忠、生年二十五。我と思はん人々は組めやく。」とて叫んで蒐く。弓手は海、馬手は山、暗さは暗し、雨は射に射て降る、道は狭し、馬に任せてぞかけ行きける。平家方より、「餘一は善き敵ぞ、餘すな。」とて進む者共には、大庭

三郎景親、俣野五郎景久、長尾新五、新六、八木下五郎、漢楊五郎、荻野五郎、曾我太郎、原宗四郎、澁谷莊司、瀧口三郎、稻毛三郎、久下權頭、淺間三郎、廣瀬太郎、岡部六彌、太同次郎、熊谷次郎等を先として、究竟の兵七十三騎、佐那田一人に組まんとて、我先に我先にと逸れども、暗さは暗し、道は狭し、馬次第にぞ打つたりける。

一三 佐那田餘一 その二

二十三日の黄昏時のことなれば、敵も味方も見え分かず。餘一は文三を呼んで、「家安慥に聞け、我は相構へて大庭俣野が間に組まんと思ふなり。組む程ならば、急ぎ落合ひて敵

二十三日。
治承四年八月
二十三日。

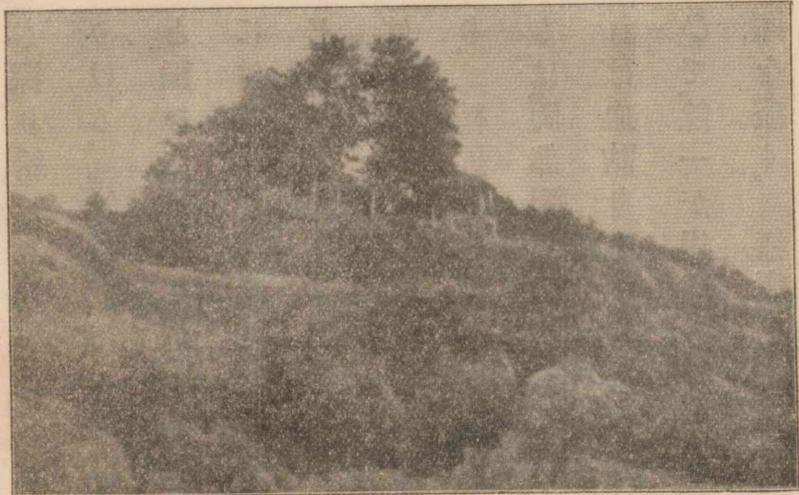
の首を取れ。此の間の勞りに力無く覺ゆれば、豫て云ふぞ。」と云ふ。文三、誰もさこそ存じ候へ。殿の大庭に組み給はば、家安は俣野、我大庭に組み候はゞ、殿は俣野に組み給へ。」とて進む處に、岡部彌次郎、餘一に組まんと志して、鹿毛なる馬に乗つて馳來る。餘一は岡部とは思ひ寄らず、大庭か俣野かと思ひ、馳寄りて兜の天邊に手を打入れて、鞍の前輪に引付けて頸を搔き、取上げて雲透に見れば、思ふ敵にあらずして、岡部彌次郎なり。「あな無慚や、鹿待つ處の狸とは此の事にや。何しに來つて義忠に打たるらん。」とて首をば谷へぞ抛入れける。餘一が乗つたる馬は、白葦毛の太く逞しきが七寸に餘りて、

鼻の先瓠の花の如く白かりければ、名をば夕顔と云ふ東國一の強馬なり。もと三浦介が許にありけるが、餘に強くて輒く乗る者無かりけるを、岡崎所望して乗りけるが、其も進退し煩ひたりけるに餘一ばかりぞ乗從へたりける。されども岡崎持和げて三浦へ返したれば、元の栖處へ歸つたりとて都返りと名づけたり。佐那田折節馬無くて又乞返したれば、古巢へ歸つたりとて鶯とも呼びけり。元來強き馬なりけれども、己が力を憑みつゝ、出雲轡の大きなるに手綱二筋縫合せてぞ乗つたりける。岡部彌次郎が首切りける時、鎧武者の身の落つるに驚きて、つと出でて走り行く。さる者ぞと心得て、引留めん引留めんとしけれども、此の馬の

癖として、口をば主に打ちくれて胸にて走る馬なりけり。猶留めんと引く程に手綱三つに切れければ、左右の水付執へたり。左右の水付引挽ぎて、心の儘に引きて行く。大庭三郎は弟の俣野五郎に「構へて餘一に組み給へ。景親も目にかゝらば組まんずるぞ。」と云ふ。俣野は「餘に暗くて敵も味方も見えわかず、餘一も何處やらん。」と云へば、餘一が鎧は裾金物の殊にきらめきて、馬の毛も白かりき。白き幌を懸けたりつれば、著しかりつるなり。」と教ふ。俣野馳出でぬ。餘一馬に引かれて近づきたり。俣野敵の寄すると思ひければ、「佐那田餘一義忠と名乗りつるは落ちぬるか。」と呼びけり。無下に近かりければ、「義忠此處にあり。問ふは誰

そ。「侯野五郎景久」と名乗るや遅き押並べて馬の間へ落重る。上に成り下に成り、驛返し持返し、山の岨を下りに大道まで四段許ぞ轉びたる。今一返しも轉びなば互に海へは入りなまし。

侯野は大力と聞くに、如何したりけん下に推附けられてうつぶしに臥し、頭は下に、足は上に、起きんくとしけれども力無かりける。餘一は上にひたと乗り得て、義忠敵に組みたり、落重れく」と呼びけれども、家安を始めとして郎等ども押隔てられて續く者なし。侯野今は叶はじと思ひて、景久、佐那田に組みたり。續けやく」と呼びけるに、長尾新五聲につきて落合ひて、上や敵、下や敵」と問ふ。餘一は上に乗



佐那田餘一組の遺跡

りながら、斯く宣ふは長尾殿か。上ぞ景久、下ぞ餘一、過し給ふな」と云ふ。侯野下にて「上ぞ餘一、下ぞ景久、過すな」と云ふ。頭は一所にあり、暗さは暗し、聲は息突きて分明に聞分かず。上よ下よと論じければ、思ひわびてぞ立つたりける。

侯野「あな不覺の殿や聲にても聞き知りなん。鎧の毛を

も探り給へかし。」と云ふ。長尾實にと思ひて鎧の毛をぞ探りける。餘一顯れぬと思ひて、右の足を揚げて長尾をむすと踏む。踏まれて下りに弓長三杖ばかりとゞ走りて倒れにけり。其の間に餘一刀を抜いて俣野が首を搔く。搔けども搔けども切れず、刺せども通らず。餘一刀を持揚げて雲透に見れば、鞆卷の栗形缺けて、鞆ながら抜けたりけり。鞆尻くはへて抜かんくとしけれども、運の極の悲しさは、岡部彌次郎が首切りたりける刀を拭はず、鞆に差したれば血詰りして抜けざりけり。長尾新五が弟に新六落合ひて、餘一が胡籬の間にひたと乗得て、兜の天邊を引仰けて頭を搔く。無慚と云ふもおろかなり。俣野を引起して、い

かに手や負ひたる。」と問へば、「首こそ重く覺ゆれ。」と云ふ。頸を探ればぬれくとあり。手負うたるにこそとて餘一が刀を見れば、鞆尻一寸ばかり碎けたり。強く刺したりと覺えたり。其の後俣野は軍はせず、佐那田餘一は俣野五郎止めたり。」と叫びければ、源氏方には惜みけり、平家方には之を悦びけり。(源平盛衰記)

一四 武士道

山路愛山

神護景雲三年、朝廷警衛の爲、東人を召させ給ひし時の詔に、「東人は、常に額に箭は立つとも、背には立てじ。」といひて君を一心に護るものぞ。」とあり。東國は蝦夷と境を接して、人種

山路愛山。
名は彌吉。
評論家。
大正六年歿す
年五十四。
神護景雲。
稱徳天皇。

の生存競争劇しく、戦争も多かりしゆゑ、自ら健氣なる風を養成したるならん。蝦夷の反亂聞えずなりし後も、天慶以來幾度か干戈動き、大名小名の私闘も亦少からず、人氣自ら上國に殊なり。かくて武士道もこの間に成長したり。

武士道とはいかなるものぞや。一定の釋義を下すはむづかしきことなれども、まづは武士の間に行はれたる面目律ともいふべきものなり。されば武士道にて第一に禁句とする所は、臆病といふ事なり。頼朝は石橋山の厄難の時、日頃警の中に隠しおきたる観音の像を取出し、我が首若し大庭等の手に渡らん時、警中に此の本尊のあるを見れば、源氏の大將の所爲に似ずとて嘲らるべし。それが口惜しければ

我が首
吾妻鏡に見ゆ。

武將の身
藤原教長の語。保元物語に見ゆ。

勅命
保元物語に見ゆ。

義平
平治物語に見ゆ。

斯くは取出し奉るものなり。」と云へり。崇徳上皇、爲義を白河殿に召させたまひし時、爲義昨夜の凶夢を陳べて、御味方たるべき仰を辭退せんとしたるに、使の殿上人「武將の身として、夢見物忌などは餘に後れたる沙汰なり。」といはれしかば、爲義實にも、とて參殿に及びたり。其の旨も、宗旨も信仰も、武士に取りては日常の事なり。一旦非常に臨んでは唯何事も惑はず突進するが武士道の極意なり。されば保元の亂に、重盛は「勅命を蒙つて罷向ひたるものが、敵陣強しとて引返すべき様やある。」といきまき、平治の亂に、義朝は義平の敗軍を見て、義平が河より西へ引きつるは、家の疵と覺ゆるぞ。今は何をか期すべき。討死せんのみ。」と

侍程の者
平家物語に見
ゆ。長谷部信
連の語。

大名は
承久軍物語に
見ゆ。

云ひて、敵陣に馳突したり。臆病は弓矢の疵となるべきものなれば、寧ろ死すとも卑怯の振舞すべからずとは、武士道の第一義にして、神護景雲の詔に、「額に箭は立つとも、背には立てじ。」とあるものと同意なり。如何なる場合にも、逃げたりなど云はれんは口惜し。「侍程の者が一度申さじと思切りし事を、縦ひ拷問せられたればとて申すべき様なし。」と云ふが如く、何事も思切つて悪びれぬを武士の魂とす。次に其の頃の武士道にて、宗と重んじたるは志の專一なることなり。尤も、大名は草の靡き」と云ふ諺は其の頃よりあり。強さうなる方に加擔して、所領安堵を求むるは一般の習なりしかども、さりとして輿論は、かく意氣地なきを善しと

源氏は
源親治の語。
保元物語に見
ゆ。

源氏の習
源義朝の語。
平治物語に見
ゆ。

凡そ武士

源義平の語。
平治物語に見
ゆ。

主若し

平家貞の語。
平家物語に見
ゆ。

關東

吾妻鏡に見ゆ。

せしには非ず。主従の義を重んじ、忠を主人の家に盡すを以て、眞の武士の面目とし、殊に主家の盛衰に従つて、向背の態度を變ずるを以て醜事としたり。されば源氏に従ふ武士は、源氏は二人の主とることなければ、宣旨なりとて、えこそ内裏へは參るまじけれ。」と云ひしものもあり。「源氏の習、心がはりやあるべき。」とて肩を怒らししものもあり。「凡そ武士には、二心を恥とす。殊に源氏の習は左様に候。」と力みしものもあり。平家に従ふ武士も、忠盛の家の子には、「主若し辱しめられたらんには、えこそ遠慮はすまじけれ。必ず殿上迄も斬り入らん。」と決心したるものもあり。平宗清は頼朝の恩人にて、頼朝より「關東に來らば善く扶持せん。」と言

吉について
平家物語に見
ゆ。

病身ながら
加藤景廉の
語。

送りたれども、平家零落の後、頼朝に參向する一條、尤も恥ぢ
存じ候。と云ひ、直ちに屋島の内府に參り、運命を主家と共に
したり。齋藤別當實盛は、吉についてあなたへ參り、こなた
へ參らんは見苦し。今は源氏の世盛となりたりとも我は
平家の味方となりて討死せん。とて、黒く染めたる白髮首を
木曾義仲の士に取らせたり。
斯く臆病を惡み、主人に忠を盡すを宗としたる武士道が、其
の結果として死生を度外に置きたるは當然なり。東國武
士が平家を西海に討ちし時、病身ながら天下の重事なり。
坐視すべきに非ず。とても死ぬる身ならば戰場に死なん
とて出陣したる者のことは、吾妻鏡にも見えたり。「事あら

合戦の場
保元物語に見
ゆ。

我は
保元物語に見
ゆ。

ば眞先かけて命を主君に奉らん。弓矢執る身は、死すべき
處を遁れぬれば、中々最期の恥あるなり。とて、腹搔切つて死
したるは其の頃の武士の習なれば、義朝も、合戦の場に罷出
でて何ぞ生命を存ぜん。といへり。されば頼朝が十四歳に
して父撃たると聞きながら、自害をもせず、池禪尼にすがり
てかひなき生命を助かりしを、時の人は善くも言はざりし
なり。

此の外、其の頃の武士道にて殊に著しき一箇條は、人々互に
功名を競ひたる事なり。爲朝が白河殿にて、我は親にも連
るまじ、兄にも具すまじ、功名不覺も紛れぬ様に唯一人いか
にも強からん方へ差向け給へ。敵たとひ千騎もあり、萬騎

もありとも、一方は射拂はんずるなり。」と廣言したるは、最も善く武士の氣習を言ひあらはしたるものにて、佐々木、梶原の宇治川先陣なども其の一例なり。

但し弓矢の道と云ひ、武士の道と云ふもの、畢竟自然に生じたる武士の面目律にて、多くは無意識の間に發達したるものなれば、此處までが武士道、此處までが武士道に非ずと、明かに區別を立て得べきものに非ず。さりとして其の面目律の制裁は、頼朝時代にても中々嚴重にして、武士道に外れたるものは武士の間には生きて居られぬ程なりき。例へば平治の亂に、源氏の士ども、藤原信賴を見限り、此の殿は、人に頬を打たれて、返事をだにし給はねば、侍の主には叶ひ難し。」

此の殿は
平治物語に見
ゆ。

と云ひしが如く、大將若し武士道の心得なければ、士卒附かず、侍若し名を惜まず、卑怯の振舞あれば、武士の間に齒せられざりき。而して此の武士道は東國に盛にして、都には流行せず。都は柔弱者の寄合なりし故、天下の勢遂に上軽く、下重くなりて、日本未曾有の大改革とはなりたるなり。さりながら東國の武士が天下の主人となりたるは、獨り武士道の盛なりしが爲には非ず。保元以來、都に兵事多く、京洛の客往々四方に散じ、天下經營の知識に東國の武力を合併したるが故なり。近き世の薩摩の事も之に似たり。薩藩は武道の盛なる處にして、百二都城の健兒は勇氣に於て天下無比なりしかども、それだけにては天下に功を立つる

こともならざりしに、島津齊彬の祖父重豪、隱居して榮翁と稱せし人、薩摩の邊土にて武士の片意地なることを憂ひ、天下の形勢をも知らしめんとし、勉めて上國の風を移し、より、薩藩固有の武士氣質と上國の知識とは此に相合して、薩人始めて眼を天下の形勢に開くに至れるなり。東國の強きのみにては、未だ天下を圖り難し。賴朝は北條・三浦・千葉・小山などいふ東國武士の力を假りたると共に、大江・廣元・三好・康信など云ふ京洛の客を愛し、其の經綸の知識を用ひたるなり。武士道も開化せざれば唯強きのみ。天下の形勢を辨へ知る知識と武士道との二味が調合して、始めて役に立ちしなり。(愛山文集)

一五 狐塚

主「此のあたりの者で御座る。某山田を數多持つて御座る。當年は事の外よう出來て御座る。さりながら此の頃は鹿・猿・貉が出て田を荒します。太郎冠者じやうくわんしやを呼びいだし、山田の番にやらうと存ずる。やい、太郎冠者在るか。」
太「はあ。御前ごまへに居ります。」

主「汝を呼び出す事別の事でない。當年は身共の山田が事の外よう出來た。其につき、此の頃は鹿・猿が田を荒す程に、汝は今夜山田へいて、鳥獸も來たらば、追うて番をせい。」
太「畏まつて御座る。私一人で御座るか。」

主「いや後程は次郎も見舞にやらう程に、先づ行け。」

太「心得ました。」

主「さりながら此の中は狐塚の狐が出てばかすと云ふ程に、ばかされぬ様にして番をせい。」

太「それはこはい事で御座る。もはや参ります。」

主「明日早々歸れ。」

太「はあ。」

主「えい。」

太「扱もく、迷惑な事いひつけられた。夜晝使はるゝといふは氣の毒な事ぢや。参る程に是ぢや。先づ是にゐて番を致さう。」

つかはう
遣はさうの
意。

主「太郎冠者を山田へ番に遣はして御座る。定めてさびし

うしてゐるで御座らう。次郎冠者を見舞につかはうと

存ずる。やい、次郎冠者あるか。」

次「是に居ります。」

主「汝は太儀ながら山田へいて、太郎冠者が伽をしてやれ。」

次「畏まつて御座る。」

主「小筒も少し持つて行け。」

次「心得ました。是は扱迷惑なれども、参らずば成るまい。

主命ぢや、是非に及ばぬ。是は暗うてどこやら知れる事
でない。呼ばはつて見よう。さほうい、太郎冠者やい。

太「どこに居るぞ。」

太「さればこそ狐が出た。あれは次郎冠者が聲ぢや。よう似せた。おのればかさるゝ事では無いぞ。先づ眉毛をぬらさう。」

次「ほうい〜。」

太「ほうい〜。ここ〜にあるは。」

次「どこにあるぞ。」

太「ここ〜にあるは。やあ次郎冠者か。」

次「なか〜。頼うだ人が言ひ付けられて伽に來たは。」

太「ようこそおりやつたれ。扱も〜ようばけた。そのま
まの次郎冠者ぢや。捕へて縛つてやらう。やい次郎冠
者。最前向ふの山から大きな鹿が出たを。身共が追うた

ればこなたの山へくわらく〜と逃げたは。」

次「それはでかした。」

太「どつこへ。やる事ではないぞ。」

次「是は何とするぞ。」

太「何とするとは。狐め、ばかさるゝ事ではないぞ。」

次「おれは次郎冠者ぢや。」

太「何の次郎冠者。おのれ縛つて、此の柱にく〜つて置いて、

狐殿、よい體の。おのれ今に皮を剥いでくれうぞ。」

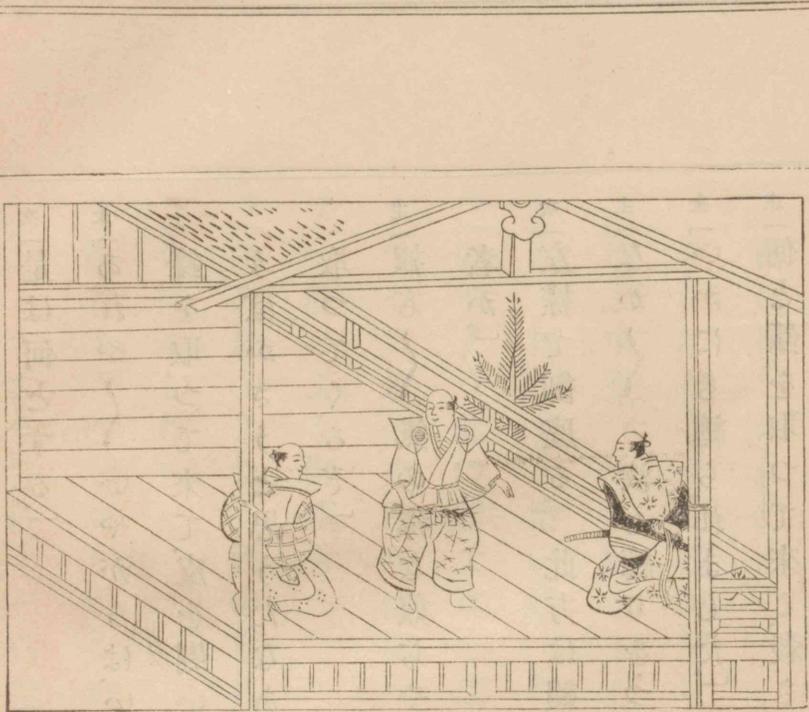
主「次郎冠者、次郎冠者を山田へ遣はして御座る。心もとな
う御座る。見に參らうと存ずる。ほうい〜。太郎冠
者やい。次郎冠者やい。ほうい〜。」

かつき
餓鬼の意。

太「是はいかな事。また狐が出をつた。あれは頼うだ人の
聲ぢや。是も捕へてやらう。ほうい〜」
主「ほうい〜、どこにゐるぞ。」
太「こゝにゐます。」
主「やあ是にゐるか。淋しからうと思つて見舞に來た。次
郎冠者を先へ遣したが。」

太「なか〜、あれにゐます。これはいかな事。是もよう
ばけた。其のまゝ頼うだ人ぢや。縛つてくれう。かつ
きめ。おのれだまさるゝ事ではないぞ。」
主「是は何とするぞ。身共ぢや。」

太「おのれもようばけた。先づ縛つて、此の大木にくゝりつ



狂言 狐 塚 (續 狂言 記)

けて置いて、致しやうがあ
る。狐は松葉でふすべる
といやがるといふ。ふす
べてやらう。さあ〜尾
を出せ。鳴け〜。」

主「おのれ太郎冠者め。主を
此の様にして。罰當りめ。」
太「何を狐殿いはるゝ。さら
ば次郎冠者もふすべてや
らう。さあ〜鳴け〜
こん〜と〜。」

次「是は何とする。」

太「あれや〜いやがるは、いやがるは。おのれ二匹ながら鎌を取つて来て、皮を剥いでくれうぞ。待つてをれ。ようばかさうと思つたなあ。唯今殺してくれうぞ。鎌を取つてくるぞ。」

主「扱も〜氣の毒な奴ぢや。やあそれに見ゆるは次郎冠者か。」

次「左様で御座る。此方は頼うだ御方か。」

主「なか〜、汝も縛りをつたか。」

次「いかにも縛られました。」

主「何と鎌を取つて来る、殺さうと言ひをつたが、何とそちが

繩はほどかれぬか。」

次「されば、どうやら繩が解けさうに御座る。解けますぞ、解けますぞ。さあ解きました。どれ〜、此方も解きませう。扱も〜憎い奴で御座る。何とした物で御座らう。」

主「いや〜此の體ではそばへよるまい程にもとの様にしているて、是へ來たらば捕へて、あいつをゆりにあげう。」

次「一段とよう御座らう。」

主「さあ是へよつて元の様にしてるよ。」

次「心得ました。」

太「狐めは二匹ながら居るか知らぬ。此の鎌で殺してくれう。さあ今打殺すぞ、打殺すぞ。」

主「それや次郎冠者」

次「心得ました。」

主「おのれにくいやつ。次郎冠者足を持って。」

次「心得ました。」

主「さあゆりに上げ、ゆりに上げ。」

太「是は何と狐ども、するぞ。」

主「狐とはまだ、おのれめは、にくいやつ。縛り居つたが、よ

いか。是がよいか。是がよいか。」

太「扱は頼うだ人。次郎冠者か。免させられ。まつびら御

ゆるされ。まつびら御ゆるされ。」

次「どこへ失せる。やるまいぞ。やるまいぞ。」（續狂言記）

兼好法師

吉田兼好

吉野朝の文學者。

正平五年（三

三）歿す、年

六十九。

一六 能をつかんとする人 兼好法師

能をつかんとする人、よくせざらん程は、なまじひに人に知られじ。うちよく習ひ得て、さし出でたらんこそ、いと心にくからめ」と常に云ふめれど、斯く云ふ人、一藝も習ひ得ること無し。未だ堅固かたほなるより、上手の中に交りて、謗り笑はるゝにも恥ぢず、つれなく過ぎてたしなむ人、天性其の骨無けれども、道に泥まず、妄りにせずして、年を送れば、堪能のたしなまざるよりは、遂に上手の位に至り、徳長け、人に許されて、雙無き名を得る事なり。天下の物の上手といへども、始は不堪の聞えもあり、無下の瑕瑾もありき。され

ども、其の人道の掟正しく、是を重くして放埒せざれば、世の博士にて萬人の師となる事、諸道變るべからず。(徒然草)

一七 四時のあはれ

兼好法師

物のあはれは
春はたゞ花の
ひとへにさく
ばかりものゝ
あはれは秋ぞ
まされる。讀
人不知。

折節の遷り變るこそ物ごとにあはれなれ。「物のあはれは秋こそまされ」と人ごとにいふめれど、それもさるものにていま一きは心も浮立つものは春の景色にこそあめれ。鳥の聲などもことの外に春めきて、のどやかなる日影に垣根の草萌え出づる頃より、やゝ春深く霞みわたりて、花もやうやうけしきだつほどこそあれ、折しも雨風打續きて、心あわたゞしう散り過ぎぬ。青葉になりゆくまで、萬にたゞ心を

花橘は
さ月待つ花橘
の香をあげば
昔の人の袖の
香ぞする。古
今集。

祭
賀茂の葵祭。
四月の中の西
の日。

のみぞ悩ます。花橘は名にこそ負へれ、猶梅の匂にぞ、いにしへの事も、たちかへりこひしう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤の覺束なき様したる、すべて思ひすてがたきこと多し。

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂りゆく程こそ世のあはれも人の戀しさもまされ。「と人の仰せられしこそげにさるものなれ。五月菖蒲葺く頃、早苗とる頃、水鶏の叩くなど心細からぬかは。六月の頃あやしき家に夕顔の白く見え、て蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月被またをかし。棚機祭るこそなまめかしけれ。やうく夜寒になる程、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づく頃、早稻田刈りほすなど、取集

思しき事
おほしき事い
はぬはげにぞ
はらふくるゝ
こゝちしけ
る。大鏡。

めたる事は秋のみぞ多かる。又野分の朝こそをかしけれ。言續くれば、皆源氏物語、枕草子などにことふりにたれど、同じ事また今更に言はじともあらず。思しき事言はぬは腹ふくるゝ業なれば、筆に任せつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやりすつべきものなれば、人の見るべきにあらず。さて、冬枯の景色こそ秋にはをさくゝ劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白う置けるあした、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてゝ、人毎にいそぎあへる頃ぞまたなくあはれなる。すさまじきものにして、見る人もなき月の寒けく澄める二十日あまりの空こそ心細きものなれ。御佛名荷^の前^の使立つなどぞあはれに

やむことなき。公事ども繁く、春のいそぎに取重ねて催しおこなはるゝ様ぞいみじきや。追儼より四方拜に續くこそ面白けれ。つごもりの夜いたう暗きに、松どもともして

花にじかひて
ふるきをおも
ふ
春の日のなが
きわかれにつ
くづくとなぐ
さめかれて花
を見るかな

花にじかひて
ふるきをおも
ふ
春の日のなが
きわかれにつ
くづくとなぐ
さめかれて花
を見るかな

筆蹟 好筆法師蹟
(前田侯爵藏)

夜半過ぐるまで人の門叩き走りありきて、何事にかあらん事々しくのゝしりて足を空にまどふが、曉方よりさすがに音なくなりぬるこそ年の名残も心細けれ。亡き人の來る夜とて魂祭るわざは、此の頃都にはなきを、あづまの方には

猶する事にてありしこそあはれなりしか。
かくて明け行く空の景色、昨日に變りたりとは見えねど、引替へ珍しき心地ぞする。大路の様、松立て渡して、華やかに嬉しげなるこそまたあはれなれ。(徒然草)

島田三郎

政治家。

評論家。

嘉永五年(二五)

三)生。

衆議院議員。

大正十二年

す。年七十二。

一八 福澤先生を悼む その一 島田三郎

三田の高臺に 嘯して、天下の瞻望を維ぎ、一管の筆を揮ひて泰西の文物を輸入し、三寸の舌を鼓して平民の氣焰を揚げたる當代の巨人福澤先生逝けり。痛悼に勝ふべけんや。先生は一代の師表にして、明治の社會、先生に負ふ所極めて大なり。曩に先生中風の症に悩み、一時世人を痛憂せしめ

天愁に
天不_二愁_一遺_一
老。左傳。
本月
明治三十四年
二月。

たれども、其の後輕快に赴き、漸く健康に復するを傳ふ。聞
く者皆愁眉を開きて之を祝せざるはなし。吾人以爲く、先
生齡六旬を越えて一旦大患に罹る、其の快談健筆以て社會
を鞭撻啓發せる故態に復せんこと難かるべし。と。然れど
も此の大平民の社會に存するは後進の恃んで心を強くす
る所なり。即ち其の優游自適一日を永くし、以て吾人の志
に酬いんを願ふこと甚だ切なりき。然るに天愁に此の老
を遺さず、遂に本月三日午後十時を以て白玉樓に徴し去る。
嗚呼先生の音容また接すべからず。豈哀惜嘆嗟に勝へん
や。
先生の出處經歷、其の主義、其の功績は普く世人の知る所な

り。其の社會に對する關係より家庭の生活に至るまで其の著書と自傳とに昭晰詳悉す。吾人今これを繰返す必要なし。然れども此の際に當り、吾人の所感を略述するは亦敬慕追念の志を表する所以なり。

先生は教育家なり、時代思想の鼓吹者なり。幕府の翻譯方となり、三回歐米に航せし外、何の經歷あらず。其の後半の生涯は三田の高臺に逸居して三十餘年を経過す。波瀾なく變化なし。然れども其の言論文章を以て一世を鼓動し、社會を陶冶したる所の偉大なる勢力は、ひとり當世に匹なきのみならず、古今を通じて有數なる者と評せざるべからず。蓋し嘉永・安政以後、日本が海外の潮流の中に漂ひ、新舊

の思想相闘ふに際し、先生は新思想誘引の先達となり、舊世界の殘壘を破りて一大勝利を博し、確かに先登の月桂冠を戴ける者なり。



福澤諭吉

先生の學專攻なし。故に一科の長所なく、又獨創の發明あらず。然れども思想博大常識明敏、進歩の見解を一切の事物に應用し

て之を社會に弘布する能力に至りては、萬人に超絶せり。且其の識見は常に社會に先んぜり。先生幼時儒教の薰陶を受け、其の長崎に赴くや、砲術を修めんと欲し、端なく蘭書

を誦習せり。此の際既に砲術の以て志を成すに足らざるを覺れり。其の江戸に來り横濱に遊びて英語の招牌を讀む能はざるや、忽ち蘭學を棄て、英語を學べり。其の海外に遊んで歸るや、幕府の衰滅免るべからざるを看取し、再び米國に入るや、兵器を購ふかはりに書籍を買うて歸り、戊辰戰亂の間冷然書を講じて顧みず。王政復古、士皆進仕を榮とするに際し、巷間に俯して後進を誘掖し、戰餘の殺氣未だ收らざるに、雙刀を脱して市民と稱せり。漢儒が門人を食客と同視する時代に授業料を收むる學校組織を立て、政事喧擾の間に社會的薰陶に力を致せり。これ皆時流に先だてる見にして、當世にぬきんづる眼を有するにあらざれば

能はざるなり。

先生は百代を洞看し、宇宙を解釋する哲學者にあらず、天人冥合、靈魂救濟を志とする宗教家にあらず、詞を修め句を鍊る文士にあらず、否却て文字のために思想を犠牲にする陋習を打破せんとせる人なり。これを要するに一代の著述文章は、崇高宏大深邃幽玄なる思想界に觸るゝに非ずして、毎時眼前の程度より一等を高めんとするにあり。而して見解分明、信仰確實、平易大膽なる文を以て之を宣傳す。其の多數を動かして偉大なる効果を收め、優に社會改造の目的を達せしはこれがためなり。先生の筆述、前後五十部百五冊、收めて其の全集にあり。此の他時事新報に載する者

テイヌ
佛國の歴史
家。
(1823 - 1893)
ジョンソン
英國の文學
者。
(1709 - 1784)

を合せば更に多からん。佛人テイヌ曾て英國文界の偉人
ジョンソンの全集を研究して謂つて曰く、「其の十九世紀に
於て新に學ぶべき奇思妙想を發見せずと雖も、其の十八世
紀の必要に應じて社會を裨益せし者多し」と。ジョンソン
の勢力が當時に盛なりし所以、其の著述が一世に功ありし
所以、こゝに在り。後の讀者其の奇思妙想を發見せざるを
以て其の功を小とするを得ず。先生の文界に於ける位置、
蓋しこれに近し。

一九 福澤先生を悼む その二 島田三郎

先生の勢力を以て單に文章識力に歸するは、能く先生を知

る者にあらず。先生は確信實行を大膽明快に筆に載す。
これ世を動かす所以にあらずや。其の獨立自尊を説くや、
口舌文章に於てするのみならず、これを其の躬行に於てし、
其の歐米の文明を鼓吹するや、これを事物に應用し、其の自
由平等を宣傳するや、階級隸屬の生活を破るに汲々とし、其
の官尊民卑の弊を論ずるや、自身軒冕を泥塗にする概あり、
其の家庭の尊貴を説示するや、先生まづ其の實例を置かん
と努めたり。是豈確信なき者の得て企つるところならん
や。

先生を以て拜金宗の大和尚となし、節義を輕んずる者と爲
すは、尤も先生と其の時代とを曉らざる者なり。蓋し先生

釋迦を罵る
釋迦といふ
たづらものが
世に出て多
くの人をまよ
はすかな。
一休。

が歐米の文物を輸入せんとするや、其の反面に於て鎖國の
舊夢を一掃するに努めざるべからず。自主獨立の主義を
宣へんとせば、其の反面に於て隸屬服從の慣習を打たざる
べからず。平民自活の生業を教へんとせば、武士世祿の依
頼心を棄てしめざるべからず。此の過渡の時機に會し、武
士の理想的人物を罵倒して以て一世を警醒せし者即ち有
名なる楠公論にあらずや。是楠公其の人を撃つにあらず
して武士の舊思想を撃ちたる者、恰も一休の俗僧を破せん
が爲に釋迦を罵りたる意に髣髴たり。其の金錢を貴ぶ説
法は「武士は食ねど高楊枝」の氣習を破したる者に過ぎず。
先生これがためには世の怒嘲を冒して戰へり。吾人却て

ヴォルテール
佛國の文學
者。(1694-1778)

荀卿
周の大儒。
性惡説を唱
ふ。

李斯
楚の人。荀卿
に學ぶ。秦の
始皇及び二世
皇帝に仕ふ。

先生の勇悍を稱せざる能はず。

先生の明治社會に於ける位置は頗るヴォルテールが十八
世紀の佛國に於けるものに似たり。先生が歐米の文物思
想を總概して輸入せんとし、博大通達の材を以て盛に翻譯
著述に従事せし所、恰もヴォルテールが英國に博採せしに
似たり。甲が儒教を説教せし所、恰も乙が羅馬加特力を破
壞せんとせし者に類す。而して其の辯銳利、共に能く破壊
の目的を達したれども、其の言奇矯、後進をして誤解せしめ、
一は遂に拜金宗といふ一派の信仰を形成し、他は遂に宗教
其の者を撃破せしが如き看を呈するに至れり。三田の末
流に拜金の臭味あるは、荀卿の説によりて李斯の徒を出し

生を知らず
季路問事鬼神
子曰未
能事人焉能
事鬼敢問
死曰未知
生焉能知
死



福澤諭吉筆蹟

たるに類す。吾人は先生を以て此の宗派の大和尚と認むる能はざるなり。
先生は儒教を痛撃し、自活生業を稱道せしが、先生の行は却て儒教の旨に協へり。は一見奇なるが如くなれども決して奇ならざるなり。先生は形而上の考案に多くの思を凝らさず、専ら實踐躬行を貴べり。是「生を知らずして焉ぞ死を知らん」との旨に合するにあらずや。先生の

性と天道
子曰夫子之文章可得而聞也。夫子之言性與天道不可得而聞也。

天爵

有_レ天爵者、
有_レ人爵者、仁
義忠信樂善
不_レ倦、此天爵
也。公卿大夫、
此人爵也。

人々己に

欲_レ貴者、人之
同心也、人々
有_レ貴、於己
者、弗_レ思耳。
晉楚の富
晉楚の富不
可_レ及也。
彼以_レ人爵、
我以_レ吾仁、
彼以_レ其富、
我以_レ吾義、

歐米の文物を輸入する、専ら制度・商業・工業・科學の實物的傾向を有し、哲理・宗教の研究工夫を要せず。是、性と天道とを語らざる者に類するにあらずや。其の一方に武士的生活を打撃するに拘らず、去就を嚴明にして處士自ら高うせる迹は儒教の進退節義を言ふ者に類す。其の自尊といふ教訓を以て天爵を全くせんとするは、孟軻の「人々己に貴きものあり」といふに合し、其の軒冕を泥塗にして王公に屈下せざる所は、大人を藐視し、晉楚の富と爵とに對するに徳と齒とを以てしたるに似たり。先生は知識を歐米に博採せしが、其の行實は幼時の儒學に涵養せらるゝこと深く、唯俗儒の範圍を脱したる者の如し。これを聞く、先生の嚴父百助

君儒學を修め、伊藤東涯の人と爲りを慕へり」と。堀川の實踐學派、先生の心を養ひしものか。而して先生少時尤も春秋左氏傳を愛讀せりといへば、節義に嚴なるところ、由來なしと言ふべからず。

先生晩年著す所頗る壯年の思想に異なり。福翁百話中往形而上の問題に涉るものあり。然れども科學的研究の結果にあらず。先生は結局常識の人なり、實踐の人なり。博大なる思想家にして精深なる考究家にあらず、大膽なる論辯家にして懷疑の批評家にあらず。唯其の四十年間一貫の行徑を辿りて世の風濤に蕩搖せられず、誠實に社會を薰陶し諄々として倦まず、言行一致平易の言を立て、萬人

の行ひ得る道を宣へ、自ら善くし、兼ねて人を善くせる、其の大功誰か先生に比すべき者あらん。眞に常識の巨人、平民の典型なり。獨立自尊の四字は先生の躬行によつて社會に現示せられたり。先生の書は以て先生を評するに足らずして、唯其の行實を研究して始めて能く其の教育を解得すべし。今や此の巨人を失へり。明治社會の損失これより大いなるはなし。吾人、公に於ては平民の典型を奪はれたるを惜み、私に於ては敬慕せる巨人を失へるを悲しむ。

(福澤先生哀悼錄)

二〇 賀茂眞淵

伴 蒿 蹊

春滿。
山城伏見稻荷
山の祠官。
國學者。
元文元年(二元
ご卒す年六十
九。

在滿。
春滿の甥。
國學者。
寶曆元年(二四
二)卒す年四十
六。

大人。
春滿を指す。

眞淵は姓賀茂、縣主、岡部衛士と名のる。遠州濱松の人。春滿に従ひ、家僕のごとくして京都に學ぶこと年あり。學成りて江戸に下り、大いに古學を唱ふ。春滿は萬葉の解に功ありといへども、歌はその風をよまず。在滿は「萬葉の比は文華いまだ開けず、歌の盛は新古今集の時なり」といへり。眞淵に及びて、はじめて萬葉の風をよみうつし、文章も亦古言をもて綴り、一家を成し、世の耳目を驚かす。從ひ學ぶもの多し。

その説に、「契沖は新墾たひばりしつれど、未だよく植ゑつくさぬ程に過ぎしこそ惜しけれ。大人は歌のみかは、舊りぬるちゞの書どもをあらすきかへし、いたづきのかひ、さはなれども、

まだ刈りをさめ果てざるに病に臥しつななどいひて、おのれ是がなりはひを遂ぐるよしなり。實に古を發揮して後生



(藏圖柏竹) 像淵眞茂賀

を誘ふ功少ならず。其の證をいはゞ、或時南郭服部氏を訪ひて物語らふついで「唐詩の風韻衰へて六朝に及ばぬは、汾上驚秋」の

詩にて知りぬ」といふ。南郭いかに」と問ふ。さればよ「北風吹、白雲萬里度、河汾」といへる起承の句、誠に羈旅の秋情いはん方なきに、「心緒逢搖落、秋聲不可聞」の轉合の句、上の意を注

南郭服部氏
名は元喬。
徂徠の門人。
古文辭家。
寶曆九年(二四
二)歿す年七十
十。

せしに、氣格の落ちたるを覺ゆ。吾が邦の歌も、後世のさま
劣り行くは、唯此の如し。」といへば、南郭も大いに感服せりと
なり。又山部赤人の歌、

田子の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ、

富士の高嶺に雪はふりける。

といふを注して、「田子の浦より磯傳ひに薩埵の山陰を打出
でて見れば、富士の高嶺の雪眞白に天外に秀でたるを、こは
いかでと見て感じたるさまなり。何ともいはで有りのま
まに述べたるに、其の時、その地、其の情、おのづから備ること、
古の妙なるものなり。赤人は短歌の神なること此の一首
にても知らる。」と解きて、細註に、「悠然見南山」といふも相似た

りといふ人侍れど、かれは、その處にての事、是はふと山陰よ
り立出でて見出したるなれば、其の義異なり。又悠然とし
てとは、みづからの心を注せるに似たれば、猶作れるものな
り。此の歌は、唯有りのまゝなるが似る者なきなり。」など論
ずる所、深くその旨を得たりといふべし。

されども何につけても大成を任とせる故に物事に疑を闕
かず、強解もまたまゝ見ゆるにや。又唐國のことを仇のご
といひて、孔子をさへ議することあり。是は世の儒士自ら
夷と稱し、此の國の非を數へて唐土に生れぬを憾むること
きを憤れるなるべし。是固よりその罪いふべからず。皇
神の御恵に漏れたる國の蠹なり。されどもまた眞淵も甚

歳七十有餘
明和六年(四三)
九歿す年七十
三。

宇萬伎。
加藤五郎左衛
門美樹。
國學者。
安永六年(四三)
七歿す年五十
三。或はいふ
五十七。

だしといふべし。譬へば病を薬せんは、是になきものは彼處に求めんに何の忌むことかあらん。唯病の平らくをせんとすべきのみ。こは心狭きが故か。生涯國學を任として江戸に終る。歳七十有餘とぞ。その詠み出でたる歌門人宇萬伎が記しおけるうち、少し書き出す。

春の日山を望むといふ題を

見渡せば天のかぐ山うねび山

あらそひたてる春霞かも。

その住居を縣居と名づけゝる處にて、長月十三夜によめる。

秋の夜のほがらくと天の原

照る月影に雁鳴きわたる。

神無月ばかり嵐を

科野なる須賀の荒野に飛ぶ鷺の

翼もたわに吹く嵐かな。

又若きほどの歌とて、別に朱をもて宇萬伎が書添へし中、

鳴子ひく門田の稻のほどもなく

立ちてはかへるむら雀かな。

宇萬伎いふ「これら姿も詞もよろしきものから、ころかしこきに過ぎていと後の世のさましたり。中

さだには詞も姿も唯あがれる世のさまにのみ詠み
 うつされし多かりしを、やゝ老に至りてかゝるさま
 に(前の歌ど)のみ詠み出でられしはいと高しとも高
 し。世に聞き知る人はありや、なしや。」
 蒿蹊いふ、此の老の後のはおのれも聞き知る人の數
 に入るべし。又若きほどのは後の世のさまなれば、
 歌主の後の意にはかなはざらめど、其の才のたけた
 るを覺ゆ。かゝればこそ一家の學をも唱へ出しけ
 れ。」(近世畸人傳)

二 春の心

賀茂真淵

うららかなどけき春の心より

にほひのさくら山桜花

加藤宇萬伎

ものふの草むすかばね年ふりて

秋風さむしきちかしの原

小澤蘆庵

大堰川月と花とのおぼろ夜ふ

ひとり霞まぬ浪のおとかな

加藤千蔭

桔梗が原
信濃國東筑摩郡洗馬附近の原。武田信玄と小笠原長時との會戦せし處。
 小澤蘆庵
京都の歌人。享和元年(一八一)歿す年七十九。
 加藤千蔭
江戸の國學者。文化五年(一八二)歿す年七十四。

村田春海

江戸の國學者。

文化八年(四一七)一歿す年六十

六。

木下幸文

京都の歌人。

文政五年(四一六)二歿す年四十三。

香川景樹

京都の歌人。

天保十四年(三三三)三歿す年七十四。

隅田川みのきくくたす筏師に

かすむあーたの雨をこそしき

村田春海

心あてに見し白雲はふもとにて

おもはぬ空にはる富士のぬ

木下幸文

行きて見むらね花ある寺なるむ

松原ごーに鐘きくゆなり

香川景樹

づくより駒うちいさむ佐保川の

さいれにうつろし菊の花

加納諸平

雲からわたのみなかに荒潮を

雨とあらせり 鯨うかづり

中島廣足

賤の男が芥らゆらす山畑の

冬末のうねにひたききくくなり

橋曙覽

はねなす蜂あたるかたみなをさる

窓をさうづめてさくさくひかな

橋曙覽
福井の歌人。
明治元年歿す
年五十七。

中島廣足
熊本の國學者。
元治元年(三三三)
三歿す年七十

加納諸平
和歌山の歌
人。
安政四年(三三二)
七歿す年五十

本居宣長

國學者。
通稱中衛。
鈴屋と號す。
享和元年(一八一六)
二月歿す年七十
二。

二二 師の説になづまず 本居宣長

おのれしむ古典をとくに、師の説とたがへること多く、師の説の
わろき事あるをばわきまへいふこともおほかるを、いとあ
るまじきこと、思ふ人おほかめれど、これすなはちわが師
の心にて、つねにをしへられしは、後によき考の出できたら
んには、かならずしも師の説に違ふとて、なほゞかりそ。とな
ん、教へられし。こはいとたふときをしへにて、わが師の、よ
にすぐれ給へる一つなり。大かた古をかむがふる事、さら
にひとり二人の力もて、ことごとくあきらめつくすべくも
あらず。又よき人の説ならんからに、多くの中には、誤もな

どかなからん。必ずわろき事もまじらでは、えあらず。そ
のおのが心には、今はいにしへのこゝろ、ことごとく明らか



本居宣長 (本居滿造藏)

なり、これをおきては、ある
べくもあらずと、思ひ定め
たることも、思の外に、又人
のことなるよき考もいで
くるわざなり。あまたの
手を経るまに、さきざ

きの考のうへを、なほよく考へきはむるからに、つきつに
くはしくなりもてゆくわざなれば、師の説なりとて、かなら
ずなづみ守るべきにもあらず。よきあしきをいはず、ひた

ぶるにふるきをまもるは、學問の道には、いふかひなきわざなり。又おのが師などのわろきことをいひあらはすは、いとも畏くはあれど、それもいはざれば、世の學者その説に惑ひて、長くよきをしる期なし。師の説なりとして、わろきを知りながらいはず、つゝみかくしてよきさまにつくろひをらんは、たゞ師をのみ貴みて、道をば思はざるなり。宣長は道をたふとみ古を思ひて、ひたぶるに道の明らかならん事を思ひ古の意のあきらかならんことをむねと思ふが故に、わたくしに師をたふとむことわりのかげんことをば、えしもかへりみざることあるを、なほわろしとそしらん人はそしりてよ。そはせんかたなし。われは人にそしら

れじ、よき人にならんとて、道をまげ、古の意をまげてさてあるわざはえせずなん。これすなはちわが師の心なれば、かへりては師をたふとむにもあるべくや。そはいかにもあれ。(玉勝間)

二三、こゝろ

北原 白秋

私が葛飾の眞間の龜井坊といふ廢れた古い庵寺に、一夏妻と二人で侘びしい住みかたをしてゐた時のことである。ある闇のころであつたが、何氣なく庭に下りて、籬の外に出て見ると、そこには廢れた田圃があつて、あたりの八つ手や小竹や、葛の葉の繁みに、思ひがけなく螢がちら／＼してゐ

北原白秋
名は隆吉。
歌人。
詩人。
明治十八年
生。
葛飾の眞間
千葉縣東葛飾
郡市川町大字
眞間。

た。嬉しいと思つたので「出て見ないか、おい、螢があるよ。」と内の方へ聲をかけた。「あら」と妻の方も驚いた聲を立てたが、そゝくさと走り出して来たものだ。手には圓い白いものを持つてゐる。團扇である。私も驚いて、「その團扇はどうする。」と聲に出したが、それがやゝ強かつたか、妻もびくりとしたけはひで團扇を背後に隠した。隠した、そこまで氣がつけば有難い。然し人から訊かれてはじめて、氣がつくのではおそい。私は妻に云つた。氣がついたらいゝが、螢があると聞いたら、たゞ飛んで来ればいゝ。はつと思つた拍子にすぐに團扇と感じて手にするといふ風では、あまりに心の修養が足りない。團扇は何のためか。むろん螢

をはたき落す積りである。すると、螢はたく、團扇と三つ一緒になつてはつと思つたのである。ことに螢に團扇は昔からのつきもので、提燈の繪にも商店の團扇繪にもさらにある。第一に古くさいではないか。螢と聞いて直に捕るといふ心を起すのも淺はかである。さういふはつでは困つたものだ。私ならたゞ飛んで出る。觀ようと思ふばかりで出る。それから奇麗だとか、悲しいとか、寂しいとか、あはれだとか、色や光や物陰の様々をもしみぐゝと觀て感ずる。それはその人の心の高下にもより、悲みの深さ、淺さ、趣味や學問の廣さ、狭さにもよる。色々に見える。それから歌にもなれば、詩にも、繪にもなり、言葉にもなる。何事も平

常の心懸次第である。修養次第である。平常心を尊く磨いて置くことである。而も素直に鮮かに心から驚くことである。はつと思ふにも思ひ方がある。さうでは無いかと私が云つたので、妻も「全くさうでございました、濟みません。」と頭を下げた。「私に濟むも濟まないもない、あやまるなら、螢にあやまんさい。」私も笑ひ出した。私の云ふのは螢を捕るのは殺生だ、生きものを殺すものではないといふ、世のいはゆる道徳的な見方からばかりでは無い。もつと深い詩人としての心から、私の詩や歌の道の上から來た言葉である。

心柄といふものはほんの一寸した言葉の端にも現れるものである。

私の居た寺の坊さんに、或時銚子行の川蒸氣の話が出たので、「此處から銚子まではよほどでせうね。」と訊くと、「いや、たいした賃錢でもありません。」と坊さんが答へた。私は里數を訊いたのに、坊さんはたいへんなことを答へたものである。坊さんはこの一言で、飛んでもない俗僧であることを私に知らして了つた。

また、かういふことがあつた。

或歌自慢の人が眞間に尋ねて來て、私に歌を見てくれと云

つた。大概かういふ人の見てくれは教へてくれといふのではない。驚いてくれ、褒めてくれといふのである。私はさういふ人の心持はよく分つてゐるし、程々にしてゐる。かういふのはいけないのだと云つたところで、逆上せてゐるので分らう筈はなし、先方でほんとに教はりたいといふ謙つた心が無い以上、私の方でもむきになつてやりこめる必要は無い。なるべく精々批評の水準線を低めて、少しでもいゝところがあれば、それを見てやつて、まあ結構ですぐらゐにしてしふ。でなければ第一私の時間が役にも立たぬ事ですぶれてしふし、たゞもう頭を下げて一時も早く返してしふ方がよい。何を云つたつて、お天狗さんには分ら

ないのだから、ひとりでに歌のむつかしさに恐れ入つて、始めて顔を赤くする時節を待つてやるより外はない。獨で居て、自分の歌に顔が赤くなればしめたものである。そこで、その人もさういふ人だとすぐに見て取つたので、まあ散歩でもして見ようと一緒の外に連れ出したものだ。歌の自慢など聞くより、外へ出て雲でも見た方がどれだけせいゝ／＼するか知れない。どうせ時間をつぶすならその方がよい。その人は途々も何かしらしゃべくつてゐたやうだが、私は夕方の空や田圃の景色にばかり眺め入つてゐたのである。

まだ赤い夕焼が西の空には残つてゐた。眞間の小川の土

手の上を歩いてゐると、ふとその人がしゃがんで小石を拾つた。何をするのかと見ると、何といふ可憐な繪模様だつたらう、私は思はず立ちどまつて了つた。

其處には鮮かな裏白の葉の河楊が水の面に揺れてゐた。其の撓んで揺れ動いてゐる一つの枝にはまだ小さな燕の子が一羽留つてゐた。又一羽來た。枝はいよく揺れる。枝の先は水へついて波を立てゝ居る。燕の子達は紅い頬を揃へてさもよく恐しさうに啼立てる。又一羽留ると枝はいよく揺れ出した。ともすると滑り落ちさうになるので今は必死となつて縋りついてゐる。そのつやくした黒い裂羽、いたいけな啼聲。それだけでもかはいゝのに

また一羽羽たゝいてつい近くまではやつて來るが、枝の上の燕の子はそれを見て慌てゝいけない、いけないと啼く。これ以上留つては枝がすつかり水につかつて了ふのである。空の一羽は留るには留られず寂しさうに啼きながら翔つては近より、近よつてはまた翔り出す。

その燕に向つて小石を投げたのである。私ははつとしたがそれでも黙つてゐた。寂しい氣持で微笑みながら、私はまた何氣なく歩みを續けた。さうして或處までその人を送つて行つてから、左様なら、またお出でなさい。」と別れの握手をした。それで歌は到頭見ずじまひである。見なくとも、もうどれだけの歌か分つて了つたので

ある。無論どれだけの歌を作る人かも分つてゐる。何故か。

それはその一事で、その人の人柄がまだ出来てゐないといふのが、はつきりと私に分つて了つたからである。心ができなければ歌はできない。

少しでも心の修業、ことにこの道の修業が積んだ人なら、また少しでも繪や音樂の事が分る人なら、夕焼の空にまづ心惹かれる。眞間の小川の薄明りにまづ心を唆られる。その薄明りの中に河楊が揺れてゐる。揺れる小枝に心も揺れる。揺れる小枝は燕の子が動かしてゐる。燕の子も動いてゐる、啼いてゐる、しがみついてゐる。これだけでも生

きた燕の生を感ずる事ができる。小さな燕にも大自然の生が揺れに揺れてゐる。繪の方から見ても黒と頬紅と、白と緑の葉と、撓んだ枝と水の色と夕焼と、これだけでも立派なものである。音樂の方から云つても、何物にも微妙なりズムのあらはれがある、みんな動いてゐる。様々に強く弱く揺れてゐる。それに一羽來、二羽來、空にも一羽留りもやらず翔つてゐる。あはれは益、深く益、揺れるばかりである。観た眼から云つても三羽すり寄つてしがみつゝ姿はいゝ。近よりかけて枝が揺れるのに驚く燕の形もいゝ。それらの動きリズムも愈細かになるほどいゝ。燕の「心」そのもの「生」そのものを深く観て、その「心」を自分の「心」とし、その

生を自分の「生」とおんなじに観る、私達の突きつめた觀照から、それは立派な象徴の詩や歌そのものである。これだけの事は、一寸見た瞬間に、自分の頭に這入つて來べき筈である。眼で見、耳で聴くだけは、まだしも、靈全體ではつと感ずる位でなければ、歌や詩は出來ないのである。その人ははつとは思つたが、小石を投げた。人間が出來てゐない。詩人として修業が積んでゐない。歌などは見なくとも分つてゐる。くれぐれも云ふが、これは人間は萬物の靈長である、それであはれな鳥や小蟲をいぢめてはいけなさと云ふやうな修身や、説教の心もちばかりでは無い。自分の道とするところから、もそつと深く美

しい心持で云ふのである。(洗心雜話)

二四 扇の的

さる程に
安徳天皇壽永
四年二月十八
日。
判官
檢非違使尉源
義經。

柳
表白裏背。

さる程に、阿波讃岐に平家を背いて源氏を待ちける兵ども、あそこの峯、この洞より十四五騎、二十騎うち連れうち連れ馳せきたる程に、判官程なく三百騎になりたまひぬ。「今日日は日暮れぬ、勝負を決すべからず」とて源平互に引退くところ、沖より尋常に飾つたる小船一艘汀へ向つて漕寄せ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、船を横さまになす。「あれは如何に」と見るところに、船の中より年の齡十八九許なる女房の柳の五衣に紅の袴着たるが、皆紅の扇の日出し

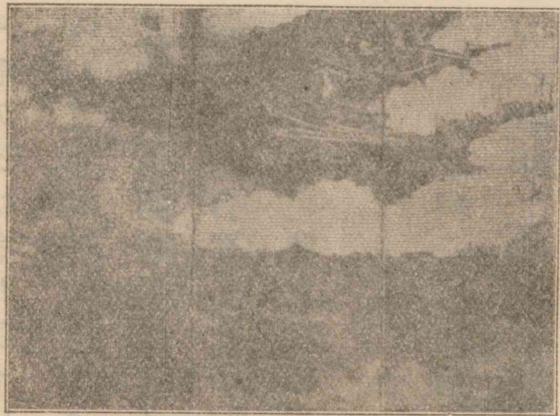
たるを船のせがいに挟みたて、陸へ向つてぞ招きける。
 判官後藤兵衛實基を召して、「あれは如何に。」とのたまへば、「射
 よとにこそ候らめ、たゞし大將軍の、矢面に進んで御覽せ
 られん所を、手だれに狙ひて射おとせとの謀とこそ存じ候
 へ。さりながら扇をば射させらるべうもや候らん。」とまを
 しければ、判官身方に射つべき仁は誰かある。」と問ひたまへ
 ば、「手だれども多く候なかに下野の國の住人那須太郎資高
 が子に與一宗高こそ小兵にては候へども、手はきいて候。」と
 申す。判官證據があるか。「さん候。かけ鳥などを争ひて
 三つに二つは必ず射落し候。」と申しければ、判官「さらば與一
 呼べ。」とて召されけり。

はたそで
 袖一、幅半のう
 ち、袖口の方
 半幅。
 足白の太刀
 緒をとはず金
 具を銀にてつ
 くれる太刀。
 ぬための鏑
 鹿の角にて作
 れる鏑。

與一その比はまだ二十ばかりの男なり。かちんに赤地の
 錦を以ておくび、はたそでいろへたる直垂に萌黄緘の鎧着
 て、足白の太刀を佩き、二十四差いたる切斑の矢負ひ、薄切斑
 に鷹の羽割合せてはいだりけるぬための鏑をぞ差添へた
 る。滋籐の弓、脇に挟み、甲をば脱ぎて高紐にかけ、判官の御
 前に畏まる。

判官「いかに與一、あの扇の眞中射て敵に見物せさせよかし。」
 と宣へば、與一「仕つとも存じ候はず。これを射損ずるもの
 ならば、永き身方の御弓矢の疵にて候へし。一定仕らんず
 る仁におほせつけらるべうもや候らん。」と申しければ、判官
 大いに怒つて、「今度鎌倉を立つて西國へ向はんずる者ども

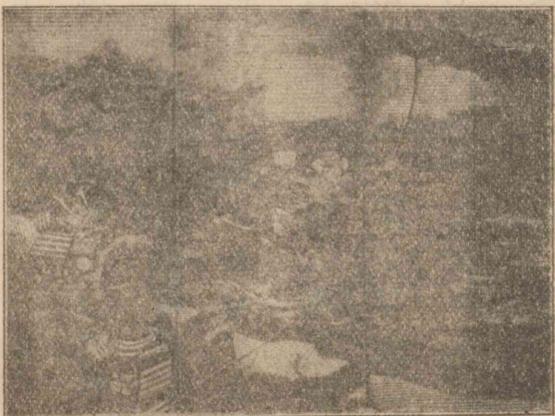
は、皆義經が下知を背くべからず。それに少しも仔細を存
ぜん人々は、これより疾くく、鎌倉へ歸らるべし。とぞ宣ひ
ける。



やどりぎの上
に越二つ飛べ
る形。

那須與一の扇

與一、重ねて辭せば悪しかりな
んとや思ひけん。さ候はゞ外れ
んをば存じ候はず、御詫にて候
へば仕つてこそ見候はめ。とて
御前を罷りたち、黒き馬の太く
逞しきにまろほやすつたる金
覆輪の鞍置いて乗つたりける
が、弓取りなほし、手綱かいくつ



射る圖 (狩野山樂筆 末松子爵藏)

かりもあらんとこそ見えたりけれ。
比は二月十八日酉の刻ばかりのことなるに、折節北風烈し
う吹きければ、磯うつ浪も高かりけり。舟は揺り上げ、揺り

据ゑ、漂へば、扇もくしに定まらず、ひらめきたり。沖には平家船を一面に並べて見物す。陸には源氏くつばみを並べてこれを見る。いづれもいづれもはれならずといふことなし。

與一目を塞ぎて、南無八幡大菩薩、別してはわが國の神明、日光權現、宇都宮、那須湯泉、大明神、願はくはあの扇の眞中射させてたばせたまへ。これを射損ずるものならば、弓切折り、自害して人に再び面を向くべからず。今一度本國へ歸さんと、思召さば、この矢はづさせたまふな。と心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹弱りて、扇も射よげにこそなつたりけれ。

與一鏑を取つてつがひ、よつ引いてひようと放つ。小兵といふ條、十二束三つぶせ、弓は強し、鏑は浦響くほどに長鳴りして、過たず扇の要ぎは一寸ばかり置いてひいふつとぞ射切つたる。鏑は海に入りければ、扇は空へぞあがりける。春風に一揉、二揉、揉まれて海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の、夕日の輝くに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ揺られけるを、沖には平家舷を敲いて感じたり、陸には源氏箆をたゝいてとよめきけり。(平家物語)

二五 落花の雪

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれし後、召捕られて鎌

七月十一日
後醍醐天皇元
徳二年。

落花の雪

またや見ん交
野のみの櫻
狩花の雪ちる
春の曙。藤原
俊成。
紅葉の錦
朝まだき風の
山の寒ければ
紅葉の錦きぬ
人ぞなき。藤
原公任。

倉まで下りたまひしかども、様々に陳じ申されし趣、實にも
と赦免せられたりけるが、又今度の白狀どもに専ら隠謀の
企彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に復六波
羅へ召捕られて關東へ送られたまふ。再犯赦さざるは法
令の定むる所なれば、何と陳ずとも許されじ、路次にて失は
るゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと思ひま
うけてぞ出でられける。

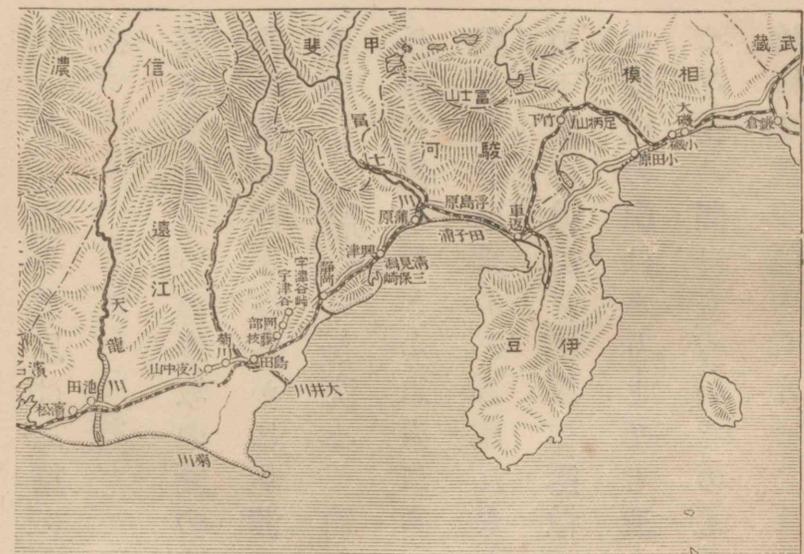
落花の雪に踏みまよふ交野の春の櫻狩、紅葉の錦を着て歸
る嵐の山の秋の暮、一夜をあかすほどだにも旅寝となれば
ものうきに、恩愛の契淺からぬわが故郷の妻子をば、行方も
知らず思ひ置き、年久しくも住馴れし九重の帝都をば、今を

世をうねの
野

近江より朝立
ちくれば、ね
の野にたづぞ
なくなる明け
ぬこの夜は。
古今集。
時雨もいた
く
白露も時雨も
いたくもる山
は下葉のこら
ず色づきにけ
り。紀貫之。

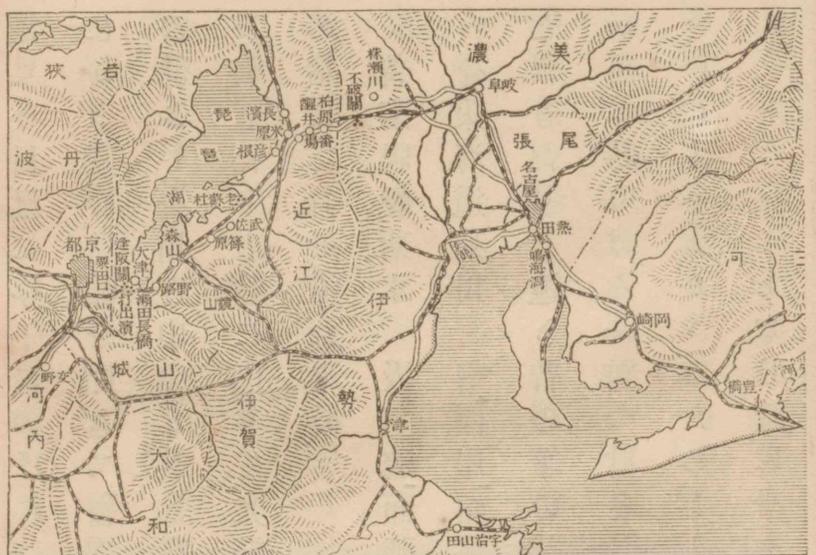
かぎりと顧みて、思はぬ旅に出でたまふ心の中ぞあはれな
る。
憂きをばとめぬ逢坂の關の清水に袖濡れて、末は山路を打
出の濱。沖をはるかに見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く
身をうき船の浮き沈み。駒もとゞろと踏みならず勢多の
長橋打渡り、行きかふ人にあふみちや、世をうねの野に鳴く
鶴も子を思ふかとおはれなり。時雨もいたくもり山の木
の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎゆ
けば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見えわかず。物を思
へば夜の間にも、おいそのもりの下草に駒を留めて顧みる、
故郷を雲や隔つらん。

なるみがた
小夜千鳥聲
そ近くを
がたがたむく
月にしほやみ
つらん。
藤原季能。



番場醒ヶ井柏原不破の關屋
は荒れ果て、猶もるものは
秋の雨、いつかわがみのをは
りなる熱田の八劍伏しをが
み、沙干に今やなるみがた。
かたぶく月に道見えて、明け
ぬ、暮れぬと行く道の末はい
づこととほたふみ、濱名の橋
の夕汐に引く人もなき捨小
舟、沈みはてぬる身にしあれ
ば、誰かあはれとゆふぐれの

命なりけり
年たけてまた
越ゆべしと思
ひきや命なり
けりさやの中
山。西行法師。



晩鐘鳴れば、今はとて池田の
宿に着きたまふ。
旅館の燈幽かにして、鶏鳴曉
を催せば、匹馬風に嘶えて天
龍川を打渡り、小夜の中山越
え行けば、白雲路を埋み來て
そことも知らぬ夕暮に、家郷
の天を望みても、昔西行法師
が「命なりけり」と詠じつゝ、二
度越えし跡までも羨ましく
ぞ思はれける。隙行く駒の

光親卿
中納言藤原宗
行の誤。

昔南陽縣
南陽縣有
甘公。谷中水
甘美。上有大
菊。落。水從
山流下。得其
滋液。谷中人
家飲。此水
上壽百二十三
其中百歲。七
八十者則爲
天。風俗通。

足早み、日已に亭午にのぼれば、餉進らする程とて、輿を庭前
にかき止む。轅を叩きて警固の武士を近づけ、宿の名を問
ひ給ふに、「菊川と申すなり。」と答へければ、承久の合戦の時、院
宣書きたりし咎に因りて、光親卿關東へ召し下されしが此
の宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水 汲下流而延齡

今東海道菊川 宿西岸而終命

と書きたりし遠き昔の筆の跡、今はわが身の上になり哀や
いとゞ勝りけん、一首の歌を詠みて宿の柱にぞ書かれける。
いにしへも、かゝるためしをきく川の
おなじ流に身をやしづめん。

大井川を過ぎたまへば都に
ありし名を聞きて、龜山殿の
行幸の嵐の山の花ざかり、龍
頭鷓首の船に乗り、詩歌管絃
の宴に侍りし事も、今は二度
見ぬ夜の夢となりぬと思ひ
續け給ふ。島田藤枝にかゝ
りて、岡邊の眞葛うらがれて
物悲しき夕暮に、宇都の山邊
を越え行けば、蕪かつらいと
茂りて道もなし。昔業平の



島田 (東海道五十三次の内)

夢にも人に
駿河なるうつ
の山べのうつ
つにも夢にも
人にあはぬな
りけり。

上なきおも
ひ
富士の煙の煙
はなほぞ立ち
のぼる上なき
ものはおもひ
なりけり。
藤原家隆。

中將の住む處を求むとて、東の方に下るとて、夢にも人に逢はぬなりけり。」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。清見瀉を過ぎたまへば、都に歸る夢をさへ通さぬ波の關守にいとゞ涙を催され、むかふはいづこ、みほが崎、興津、蒲原打過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なきおもひに比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎ行けば、汐干や淺き、船浮きておりたつ田子のみづからも浮世を遶る車返。竹の下道行き、惱む足柄山の峠より大磯、小磯見おろして袖にも波はこゆるぎのいそぐとしもはなけれど、日數積れば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ着きたまひけれ。(太平記)

菊池 寛
小説家。
戯曲家。
明治二十二
年生。

二六 敵討以上 その一 菊池 寛

第一場

時は延享二年の春。

處は九州耶馬溪青の洞門。(便宜のため後代の稱呼を用ふ)洞門の入口、右手に岩石が削られて、山國川の流の一部が見えて居る。他は舞臺一面や、灰色を帯びた岩壁。岩壁の中央に、高さ三間横四間位の洞穴が口を開けて居る。周圍には小さい石塊が、ごろ／＼落ち散つて居る。川に依つて杉の若樹が數本生えて居る。岩壁のはづれを棧道が危く傳つて居る。鎖を力に渡る鎖渡である。幕が開くと、やゝ身分のあるらしい老人、物賣の女、馬を連れた百姓が危げに鎖渡しを順次に渡つて来る。渡つてしまふと皆舞臺にて暫く休息する。

老人(ほつとしたやうに石に腰かけながら)年に一度、宇佐の八幡様へお参りの心願を立てたのもえゝが、この鎖渡だけはいつも／＼命がけの難所ぢや。此の頃は、風も吹かいて、棧が掛けかへたばかり

で新しいから、命の心配はないものゝ、年寄には、足元が危うて危うて。

物賣の女 私などは樋田郷のもので、毎日一度は通ひ馴れて居りますけれど、雨の日で棧の滑る時とか、風で棧の揺れる時には、ほんまに命がけてござんすのう。

百姓(馬を引きながら、やうやく棧道を渡つて来て) あゝ大骨を折らせたな。中途で、あばれ出すまいかと思つて、びく／＼したものでやつたわい。

物賣の女(百姓に) 作藏さん、ほんまに、氣を附けないかんぜ。馬を連れる時は、ほんまに危いけに。去年の柿坂の新右衛門さんのやうに、馬諸共にころげこむと、命が無えからのう。

百姓 さうよ。馬との相對死ぢやほんまに犬死ぢやけにな。

(洞窟の入口から石工が二人石塊を擔つて出て来る)

百姓 やあ、庄どん、えらう精が出るのう。ちつとははかゝ行つた

かのう。

石工の一(石塊を下し、その上に腰かけながら) 俺が來た時とちつとも變つて居らんわい。相手が大き磐石の岩ぢやけに、半年や一年で物の十間と鑿れはせんわい。

百姓 さうぢやらう。さうぢやらう。俺などは初は針の穴からお天道様をのそくほどの及びも附かぬ仕事ぢやと思つて居つたのぢや。それにしても感心なのは、了海様の御辛抱ぢや。初は、氣違坊主ぢやの、騙りぢやなぞと、俺などは若い時には了海様の後から、小石の一つ二つは、ぶつ喰はしたことがあるのぢや。

が、あの御辛抱には、みんな頭を下げてしまつたのぢや。郡奉行様の御褒美が下つてからは、石工の數も倍になつたと云ふのう。

石工 今日ぢや、八分通りは、劔り貫いたから、もう一息ぢや。了海様は、此の頃は夜もろく／＼枕には就かれぬのぢや。

老人 わしも、どうかして此の劔貫が出来る迄は、生き延びて居た

いと思ふのぢや。此の向きぢや、わしの願ひも叶ひさうぢや。
百姓 山國七郷の百姓が、今では頸を長うして出来るのを待つて居るのぢや。わしも植附でも濟んだら、今年も御手傳ひしよと思つとるんぢや。了海様だけに働かせては冥加が恐しいからのう。

(此の時下手より又數名の百姓登場す)

百姓の二(洞穴の入口に行きて、耳を聳てながら)あゝ深うなつとるのう。これでも、二三年前までは、槌の音が入口まで聞えて來たものぢやが、百姓の三 深うなつとる。深うなつとる。俺はもう一年半といふ見込で、隣村の林八と賭をしたが、此の向きぢやわしの勝だな。
百姓の四 太い野郎ぢやのう。了海様が、土にまみれて働いてござらつしやるのに、罰が當るぞえ。

百姓の三 なに、了海様は了海様で、俺は自分の罪滅しにして居ることぢや、お前たちが恩に被ることはない、と、口癖のやうに仰しやる

ぢやらう。

百姓の四 何の、罪滅しの爲だけに、こんなどえらい事が出来るものか。みんな衆生濟度と云ふ御本願があるからぢや。俺も暇になつたらお手傳ひぢや。

百姓の三 嘘を云へ。お前は、毎年々々お手傳ひぢやと云ひながら、一度も鎚を取つたことはないぢやらう。

百姓の四 お前だつて同じ事ぢやないか。

(百姓たちが話して居る間に、中川實之助登場する。質素なる旅姿、木綿の旅合羽を着て居る。洞穴を見ると、やゝ興奮した體にて、周圍の地形を見、右手に行く鎖渡を見て引き返し、洞穴の中を見る。此の間百姓たちの注意を惹きつゝあり)

實之助(漸く百姓の二に話しかく)率爾ながら、少々物を訊ねる。此の洞窟の中に、了海と申す出家が居るさうぢやが、しかと左様か。
百姓達(口々に)居られいでどうしようぞ。了海様なら此の洞窟の主同然の方ぢやわ。

實之助 左様か。それなら尙訊ぬるが、年の頃は、およそ何程ぢや。

石工の一 (いぶかしげに未知の武士を見ながら) 了海様ならもう五十を越した方ぢや。やがて六十にも手の届く方ぢや。

實之助 (落着いて) 生國は越後柏崎ぢやと聞及んだが。

石工の一 へえ何でも雪の澤山降る國ぢやと云ふことぞ。

實之助 若年の折、江戸で奉公いたしたとは聞かなかつたか。

石工の二 あゝ聞いたことがある。俺に一度江戸の浅草觀世音の繁

昌を語つて下さつたことがある。

實之助 (漸く緊張しながら) よくぞ教へてくれた。して、この洞窟の出入

口は竝一箇所か。

石工の一 ほう。それは知れたことぢや。向ふへ口を開けるために

了海様は塗炭の苦みをして居られるのぢや。

實之助 奥行は凡そ幾町ぞ。

石工の二 そんなことを訊かされて何にせらるゝのぢや。

實之助 (少しく思索して) 了海殿とやらに、御意得たいのぢや。つかく、と

奥へ這入らうとする。

石工の一 お待ちなされませ、初めてのお人では歩かれませぬわい。

石が彼方にも此方にも突き出て居る上に、穴なども折々ありま
する。

實之助 それでは、其方に頼みがある。越後からはるゝ、尋ねて参

つた者ぢやと云うて取次いでくれられぬか。

石工の二 それでは俺が一走り行つて來よう。駈入る。

百姓の二 了海様の身寄の方でござりますか。了海様には此の山國

七郷の者が、みんないかい御恩になつて居ります。忝う思ふて

居ります。(頭を下げる)

老 人 (進み出てながら) 越後と九州の端とでは、お聞及びにもなりま

すまいが、了海様は、此の谿七郷の者には、持地菩薩さまのやうに
有難い方でござります。御恩になつて居ります。(頭を下げる。他を

願みて、御身寄の御武家様ぢや。みんな御禮を申し上げい。(皆一齊に頭を下げる。實之助精神的にやゝ困惑しながら軽く應ずる)

老人 まさか、お子様ではござりますまい。甥御様でござりますか。よう尋ねてござらしやつた。一體何處でお聞きになりましたか。

實之助 武者修行の傍、諸國を尋ね廻つたが、當國の宇佐の八幡にて人傳に聞きました。

老人 それこそ眞に神様のお引合せぢや。

百姓の二 今年で、二十年でござります。長い間、一心不亂にお働きになりました。何でもお若い時に罪業をお重ねになつた罪滅しだと仰せられて、此の頃では、夜まで鎚を振つて居られます。

實之助 (半ば獨言のやうに) 重ねた罪業の罪滅しと云ふのか。だが主殺しの悪逆は消えまいて。(はゝゝと嘲る如く笑ふ)

老人 お主殺しまで、ほゝう。が、それもあの御精進では消えて居

りませう。

實之助 消えて居るか消えて居ぬか。いまに分明いたすであらうぞ。(はゝゝと冷笑する)

(人々やゝ實之助を疑ひはじめ。各の間に私語を始める。その時、了海が石工二人に兩手を取られながら、出て来る。實之助ひそかに目釘をしめす。肉悉く落ちて骨露はれ、脚の關節以下は殊に削つたやうである。破れたる法衣によつて僧形とは知れるものゝ、頭髮は長く延びて、皺だらけの顔を掩うて居る。眼は灰色の如く濁つてゐる。洞窟の外へ出ると目が眩むと見え、よろめく。百姓達、了海を見ると膝をついて禮をなす)

石工の二 了海を介抱しながら、お危うございます。

了海 (手を探るやうに) 何處に居られるのぢや。何處に居られるのぢや。石工の二 それ、そこでござります。すぐそこでござります。

了海 (實之助の姿をおほろに見出したやうに) 何方様でござりましたか。

老眼衰へはてまして辨へ兼ねます。

實之助 (敵の衰へはてた姿を見て、やゝ駭き、最初の擬勢をくじかれたやうに) その許

が了海殿と云はるゝか。

了海 仰せの通りでござります。して、貴方様は。

實之助(やゝ興奮しながら)了海とやら、如何に、僧形に身を糞すとも、よも偽は申すまい。汝市九郎と呼ばれし若年の頃、江戸表に於て主人中川三郎兵衛を打つて立退いた覺があらう。

了海(罪を悔い、しかもその罪から救はれて居ることを示すやうな落着いた、しかし謙虚な口調で)ござります。ござります。してそれを仰せらるゝ貴方様は。

實之助 そちも忘れは致すまい、三郎兵衛の一子實之助ぢや。

了海(潸然と涙をこぼす)實之助様！ 覺え居ります。よく覺え居ります。お父上を打つて立退きました者、此の了海奴に相違ござりませぬ。

實之助 主を打つて立退いたる非道の汝を打つ爲に、十年に近い年月を艱難辛苦の裡に過したわ。このところにて會ふからは、も

はや逃れぬところと、尋常に勝負いたせ。

了海 長い御辛苦でござりました。申譯がござりませぬ。身の罪滅しばかり考へて居りました。貴方様に、是程の御辛苦をかけようとは、思ひませんでした。いざ、お斬り遊ばせ。(やゝ眼が見え始める)お顔がやつと見えました。お父上様の御無念のお顔が眼に見えるやうでござります。いざお斬り遊ばせ。お聞及びてもござりませうが、是なる刳貫は了海奴が罪滅しに掘り穿たうと思ひました洞門でござりまするが、二十年の年月をかけて、九分迄は出来上りました。了海が身を果てしても、はや一年とはかゝりませぬ。いざお斬りなされい。御身様の手にかゝり、此の洞門の入口に血を流して人柱となり申さば、思ひ残すこととはござりませぬ。

實之助(感動しながら、業志を枉げまいと努めて)よい覺悟ぢや。いかに善果を積まうとも、惡逆の報は免れぬわ。最後の念佛を申すがよか

らう。

（百姓や石工達は、事件の急激なる回轉に、最初は茫然として居る。中頃了海の身が危険であると悟る。一人の石工が、奥へ知らせにはひる）

石工の二 おゝい。みんな出て來い。（洞門の中を見て大聲に叫ぶ）

（石工達、手に／＼鐵鎚をさげ、わめきながら、そして實之助を遠巻にし、了海を庇護してしまふ。了海、石工の庇護を脱して實之助に近づかんとおせる。それを制しながら）

石工の頭 了海様を何とするのぢや。

實之助（大勢を見て、刀を抜き放つ。八方に目を配りながら）その老僧は某が親の仇ぢや。端なく今日廻り合うて、本懷を達するものぢや。主殺しの極重惡人を庇うて神佛の罰を受くるな。

石工の頭（傲然と）敵呼はりは、まだ浮世に在る内の事ぢや。見らるゝ通り、了海殿は出家の御身でござるぞ。その上、山國谿七郷は愚か豊後肥後山國川の流に沿ふ村々の者どもには、佛とも仰がれる方ぢや。其方様なぞにむざ／＼と打たせてなるものか。

實之助（全く激昂して）申すな。申すな。假令出家致さうとも、主殺し

の大罪は八逆の一ぢやわ。その方達が邪魔いたさば、片つ端から死人の山を築いてくれるのぢや。（實之助怒って斬込まうとする。石工達わつと叫んで一齊に鐵鎚を振り上げる。百姓達は小石を拾つて、投げる可く身構する）

了海（必死になつてもがく）皆の衆お控へなさい。此の御武家に石一つ指一本觸へたなら、了海はその人を恨みまするぞ。長々了海を助けられられたよしみには、たゞこの儘に討たさせて下されよ。了海打たるべき覺十分ござる。了海が此の刳貫を掘らうと云ふ心持も、今茲で打たれようと云ふ心持も、同じぢや。刳貫の成就は目の前に見えて居る。その上、かゝる孝子のお手にかかれば、了海の本懷此の上はないのぢや。皆の衆お控へなされ。石工の頭 それぢやと申しまして、貴方様の打たれるのを、傍でみす／＼見過すことが出來ませうか。

了海 了海が討たれるのを見て下さるより、その暇に石一片でも、

砕いて下さる方が、此の了海には最後の念佛より有難い。さあ！お引取り下されい！

石工の二 それやいかぬ。貴方様が死なれては此のどえらい思ひ立もどうなるか知れたものでない。貴方様が見てござらつしやればこそ、びくともせぬ大磐石と夜晝かけての戦が出来のぢや。貴方様に死なれては、今迄掘抜いた洞門が一夜の中に埋るやうなものぢや。

石工達（口々に）さうぢや。さうぢや。ことわりぢや。ことわりぢや。百姓の二 さうぢや。さうぢや。長い間の俺達の樂みが、ふいになつてしまふのぢや。今了海様に死なれてなるものか。

實之助 是非に及ばぬ。此の上妨いたす者は、誰彼の用捨はない。

了海（身もだえしながら）其方達は此の了海に、生きながら地獄の責苦を見せるのか。了海の身の罪の爲に、孝心深き御武家を傷つけ

（實之助、石工達の中に斬込まうとする。石が霞の襟に飛んで来る。たゞんとする）

ようとするのか。石一つ、御武家様に當て、見よ、了海は、舌を嚙切つても、即座に相果て、見せませすぞ。

（石工百姓達石を投げることを止める。實之助了海を望んで斬込まうとする。石工百姓達又激しく抵抗す。老人列を離れて實之助の前へ進む）

老人 お待ちなされませい。貴方様のお心も、御尤もでござりまするが、石工達、百姓達の心もやつぱり尤もでござりまする。がお心を静めて、よくお聞き遊ばしませ。貴方様がいくらあせつても、向ふは四十人にも近い人数でござります。それに、かうしてゐる中に、近在近郷の人々は了海様の大事ぢやと申して、段々駈けつけて参ります。貴方様がいかほど武藝の上手でおありなされても、人数には叶ひませぬ。さあ、茲は御思案でござります。なあ、御武家様！此の刳貫は了海様一生の御大願でござります。二十年に近き御辛苦に、身心を碎かれたのでござりまするのぢや。いかに御自身の悪業とは申しながら、大願成就を

目前に置きながら、お果てなさるゝ事如何ばかり無念でござりませう。皆の衆が、了海様を庇ふのも矢張その爲でござります。長くとは申しませぬ。此の刳貫の通じ申す間、了海様のお命を私共に預けて下さりませ。御覽の通りの御身體でござります。逃げかくれなどのなされる御身體ではござりませぬ。刳貫さへ通じました節は、御存分になさりませ。

石工達・百姓達 尤もぢや。尤もぢや。

老人 皆もあのやうに申して居ります。此の場は一先づお引取りなさりませ。若しお待ちになると云へば、御滞在のお宿もお世話いたしませう。皆の衆しかと誓ひなされい。その期に及んで屹度變改せぬやうに。

石工達・百姓達 誓うた。誓うた。しかと誓うた。

老人 了海様如何でござりまするか。

了海 御武家様の御辛苦を思へば、わしは一日も生き延びたう思

ひませぬ。

老人 それではなりましたね。貴方様のお命は、此の刳貫を刺し貫く佛様の錐のやうなものぢや。刳貫の成就するまでは軽々とお捨てになつてはなりません。御武家様！お聞きになりましたか。御思案は如何でござりまするか。

實之助(何事なき思案したる後) 了海の僧形にめでその願を許して取らさう。つがへた言葉を忘れまいぞ。

石工の頭 何の忘れてよいものか。一分の穴でも、一寸の穴でも、此の刳貫が向ふへ通じた節は、その場を去らず了海様を討たさせ申さう。さあ、了海様、思はぬ事に手間を取りました。いざ仕事にかゝりませう。

了海 いや俺は、此の場で……

(了海の留らんとするを石工達擔ぐやうにつれていつてしまふ。實之助、無念らしく見送る)

老人 さあ、お宿へ案内いたしませう。あゝ言葉をつかへて置けば、了海様には申譯ないが、網に這入つた魚でござります。たゞ時節をお待ちなさりませ。

實之助(無念の形相にて、洞門を見ながら)了海は夜は何處に宿るのぢや。

老人 夜も晝もありませぬ。お疲れになれば、坐つたまゝ岩に靠

れてお休みになります。人間の爲さることゝは思はれませぬ。

實之助 左様か。(思案をして)今宵は七日か八日か。

老人 七日でござりまする。

實之助(獨言のやうに)子の刻には月も入るのう。はゝゝゝ。微かに笑ふ

幕

二七 敵討以上 その二

菊池 寛

第二場

第一場と同じ日の夜。洞門の内部。

舞臺面割貫かれたる岩石、舞臺右端が此の洞門の行き詰りで、その岩面に面して、了

海を始め數人の石工達が鎚を振つてゐる。焚火がちら／＼燃えて居る

幕の開く前より鎚の音が聞える。幕があくと、みんな一齊に手をやすめる。

石工の一 皆が一緒に手を休めると、急に静けさが身に浸みて來るのう。

石工の二 道理ぢや。地の中へ幾町ともなく來て居るのぢやからのう。

石工の三 今宵は、みんな了海様のお傍に居ぬと、あの晝の武士が、合點

せずに又狙ひに來るかも知れぬ。

石工の一 それや念もない事ぢや。樋田郷まで人をやつて、武士が宿

つてゐる宿の周圍には、ちやんと寝ずの番を附けてあるのぢや。

石工の二 あゝもう亥の刻だらう。手がしびれるやうに痛むのう。

了海(しはがれた低い聲で)尤もぢや。今日は岩の焼き方が足りな

つたと見えて、滅法岩が堅かつたのう。あゝもう皆の衆、小屋へ

引き上げさつしやれ。了海も、もう休まう。さあ皆の衆、引き上

げさつしやれ。

石工の三 それぢや、みんなお暇をするとしよう。了海様も、もうお休

みなされませ。さあ、わしが夜のものを取つて来て進ぜよう。

(石工の三、走り去りて、やがて扉と汚き夜具とを持って来る。程よき處に敷く)

了 海 あゝ忝けない。忝けない。それぢや皆の衆、わしが先きへ

御免蒙るぞ。(了海騒ようとする)

石工の一 それぢや、了海様又明日お目にかゝりまするぞ。

石工の二 御免なさりませ。

石工の三 御免なさりませ。

(石工遠く去る。了海暫く眠るふりして、又むく／＼と起き上る)

了 海 (合掌して低聲に觀音經を誦す) 眞觀清淨觀。廣大智慧觀。悲觀及

慈觀。常願常瞻仰。無垢清淨光。慧日破諸闇。能伏災風火。

普明照世間。悲體戒雷震。慈意妙大雲。澍甘露法雨。滅除煩

惱燄。過去の罪業報い來て、實之助様のおはせられたからは、命

は風前の燈ぢや。生あるうちに、一寸なりとも一尺なりとも、掘

り進まないでは叶はぬ處ぢや。懈怠を貪る時ではない。

(岩面に膝行し、前より、烈しく打ち下す)

了 海 (聲を勵まして) 諍訟經官處。怖畏軍陣中。念彼觀音力。衆怨

悉退散。妙音觀世音。梵音海潮音。勝彼世間音。是故須常念。

念々勿生疑。觀世音淨聖。於苦惱死厄。能爲作依怙。

(狂へるが如く、打ち進む。暫くすると、實之助が舞臺の左端から忍び寄つてくる。右に太刀を抜きそばめ、左手を地につきながら、徐かに、忍び寄つてくる。了海は夢にも知らざる如く、更に觀音經を誦しつゞける。實之助、走り寄り、寄らんとして、遠くす、漸く太刀を振り翳して斬らんとし、しかも相手の一心不亂なるを見て、討ち難く、遂に刀を鞘に収めて去らんとす)

了 海 (急に振り返りて) 實之助様！何故お斬り遊ばされませぬか。

實之助 (了海に不意に言葉をかけられて、やゝ狼狽して言葉なし)……

了 海 晝間の仕宜は、さぞ御無念にござりましたらう。いざお斬

り遊ばされませ。今こそ妨いたすものは、ござりませぬ。邪魔

のいらぬ中いざお斬りなさりませ。

實之助 了海とやら、此の上は潔く此の劔貫成就の折を相待たらうぞ。

敵を眼前に控へながら、武士たるものが、手を空しうする無念さ

につがへた約束をも反古に致し、たゞ兩斷にいたさんと忍び寄つたれども、其方が一心精進のけ高さに、瞋恚の骸も、打消されて、高德の聖に對し忍び寄る夜盜の如く、獸の如く窺ひ寄る身があらまじうて、太刀を取る手が、心ならずも鈍つたわ。此の上は、心長く、其方が本願を達する日を相待たうぞ。

了 海（手を突きて平伏しながら）極重惡人の拙僧に、大願成就の月日を借して下さりまするか。忝うござりまする。此の上は、身を粉に碎いて、明日明後日にも刳開く心にて、鎚を振ふでござりませう。御孝心深き貴方様に長い御辛苦をかけまして、申譯はありませぬ。お宥し下さりませ。お宥し下さりませ。

（了海實之助に近よりながら、頭を下げる）

實之助 敵同志となるも宿世の業と申すことぢやが、いかに了海とやら、拙者もたゞ空しく此の地に止つて、其方達の働くを見るより、及ばずながら鎚を取つて、一片二片の岩なりとも、削り取つて

得させよう。其方が本懐の日が近くなるのは、取りもなほさず拙者が本懐の日が近づくのぢや。

了 海（感激しながら）よい所にお氣が附かれました。貴方様の御助力は百萬の味方より頼もしくござりまする。貴方様のお顔を
見て居れば、この了海奴も、片時も鎚が休められませぬわい。

實之助 たゞ徒然に瞋恚のほむらに心を爛らせて居るよりも、世のため人のために、鎚を振うて居る方が、此の實之助にも心安いと云ふものぢや。さらば、了海どの、刳貫の開くまでは、味方なれど、
了 海 おゝ、一寸でも二寸でも、向ふへ通りましたその節は、たゞ兩斷になさりませ。そなた様の本懐と了海奴の本懐とが、成就する日が待遠しうござりまするわ。

實之助 それ迄は、敵同志が肩を並べて、鎚を振ふも、又一興であらう。

（二人相見て淋しく笑ふ）

二八 敵討以上 その三

菊池 寛

第三場

前と同じく洞門の内部。前場より一年餘を經過したる延享三年九月十日の夜。
前場とやゝ異なり、了海と實之助とが相並んで舞臺の中央に座を占め互にたゆま
ず鎚を振つてゐる。

實之助 えいつ！

了海 おゝつ！

實之助 えいつ！

了海 おゝつ！

實之助（二寸手を休め） 石工達は、はや去り申したな。

了海（同じく手を休めて） 石工達も、今日は終日身を粉にして働き申し
た。實之助様、そなたももう休ませられい！もう、九つを廻り
ましたわ。もう御引き上げなさりませ。

實之助 なかく。夜更くると共に、心神澄み渡つて、精力は又一倍

ぢや。

了海 昨夜も、あのやうにお働きなされたものを、今宵はちと早目
にお引き上げなさりませ。

實之助 それは、其方に云ひたいことぢや。六十に近い御坊より先
きに、われらが引き上げてよいものか。（鎚を振り上げて又、えいつと打
ち下す）

了海 おゝつ（と應じて打つ）

（暫く二人とも打續ける）

了海（又手を休めて） 昨日石工の一人が、鎚音の合間に、かすかな鳥銃
の音を耳にしたと申して居つたが、御身様は耳になされましたか。
實之助 身共は、鳥銃の音は耳にせねども、一昨日の晩であつたか、か
すかに瀬鳴の音を聞いたやうに覺ゆれども、それも鎚を持つ手
を休めて、ふとまどろんだ折の夢かも知れぬのぢや。

了海 御身様が來られてからも、もう一年に近い。あゝ待遠しい

こととござる。まして、此の一月二月了海の身も心も、漸く衰へ果てまして、力も十が一も出ぬやうになり申した。今日明日と頼まれぬ命のやうに覺えます。萬が一、鎚を持ちながら、息が絶え果てるなどの事がありましたら、身の無念は兎も角、御身様に申譯のたゝぬことゝ精神を勵ましては居りますれど、あゝ今は、はや了海が辛抱の綱も切れ申した。あゝ岩よ。此の一念に微塵となれ。(烈しく打ち下す)

實之助 たゞ不退轉の勇氣ぢや。此の期に及んで、退轉なさば九仞の功も、一簣に缺くるのぢや。心を確かにお持ちなされい。今となつては、たゞ精進の外はござらぬ。えいっ！(烈しく打ち下す)

了海 いかにも、御身様の仰せの通ぢや。一下の鎚にも、懈怠疑惑の心があつてはならぬわ。念彼觀音力！おゝっ。(打ち下す)

(二人相並んで烈しく打ち下す)

了海 あゝっ。(鎚を捨て、右手を左手に握る)

實之助 (証寄つて) 如何なされた。如何なされた。

了海 思ひの外に脆い岩で、力餘つて拳までが貫き申した。(ふと、了海岩面に開かれた穴に氣が附く) 御覽なされい！不思議な穴が開き申したぞ。

實之助 (穴のところへ近づきながら) 不思議ぢや。風が通ふわ。

了海 (狂氣の如く) なに〜風が通ふと。(鎚を振り上げて、烈しく打續く、岩それに従つて崩れて洞になる) 崩れる。崩れる。快く崩れるぞ。

實之助 (了海と並んで、狂氣の如くに鎚を振る) 貫けるわ。快く貫けるぞ。

了海 あゝ風が通ふ。風が通ふ。さては、刳貫き了せたのか。實之助様、とくと御覽なされい。

實之助 (半身を穴から突き出しながら) あゝ正しく大願成就なるぞ。ほのかに光が見えますわ。闇の中にかすかに光るは山國川の流るに相違ない。了海どの、正しく大願成就なるぞ。

了海 (うめく如く言葉を發し得ず、たゞ手を合掌して身をもたえる) ……

實之助 見える！見える！聞える！聞える！川の流が、聞ゆるぞ。目の下に闇にもほの白く見ゆる。紛れもない街道ぢや。了海どの、お欣びなされい。

了海（始めて聲をあげて哄笑す） あな嬉しや。天上界へ生きながら昇る心持がする。眼も耳も衰へて、川の流も聞えねど、ほの明りは見えまするぞ。あな嬉しや。嬉しや。嬉しや。嬉しや。心の中が、煮えくり返るやうに嬉しい。（了海身悶をする）

實之助（了海の手をとりながら） 尤もぢや、尤もぢや。たつた一年手傳うても此の嬉しさは分るのに、まして二十餘年の艱難辛苦、佛神も嘉納ましまして、今宵本懐を遂げらるゝのも、固よりその所ぢや。實之助も嬉しうござるわ。

了海（ふと考へついで） 身の嬉しさに取りまぎれて申し遅れました。今宵こそお約束の日ぢや。いざお斬りなされませ。了海奴も、かゝる法悦の中に往生いたすなれば、未來は淨土に生るゝこと、

必定疑なしぢや。いざお斬りなされい。

實之助（了海のついた手をとりながら） 了海どの、もはや何事も忘れ申した。二十年來肝を碎き身を粉にする御坊の大業に比べては、敵を討つ討たぬなどは、あさましい人間の世の業だ。實之助も御坊の傍に一年の修行を積んだ仕合せに、修羅の妄執を見事に解脱いたしましたわ。見られい。月が雲を破つたと見え、月の光がさして來た。

了海（穴より顔を出しながら） おゝ嬉しや。嬉しや。老眼にも山國川の流がほのかに見え申すわ。

實之助 此の月の光が、御坊には即身成佛の御光のやうに輝き申すわ。此の實之助にとつても妄執を晴らす眞如の光ぢや。あゝ快い月影ぢや。御坊を討つ代りに、此の岩をから打たうぞ。（傍なる長き柄の鎌を取り、力任せに打つ。岩石崩れ落ちて、山國川一帯の山河の夜の姿が見えろ） 了海 げに快い月影ぢやのう。（又心付いて） いざ實之助様、お斬りな

されませ。明日ともなれば、石工共がまた妨を致さうも知れぬ。
いざお斬りなされ。

實之助(近よる)了海の手を取つて、何をたわけた事を申さるゝ。あれ見られい！柿坂あたりの峰々まで、月の光に浮んで見えるわ。あゝ大願成就思ひ残す方もない月影ぢや。

(二人手を取つて、月の光に見惚れる)

了海(やがて念珠を取出してもみながら)南無頓生菩提！俗名中川三郎

兵衛様。了海奴が、惡逆を赦させ給へ。(泣きながら頭を下げる)

實之助 恩讐は昔の夢ぢや。手を擧げられい。本懐の今宵をば心

の底より欣び申さう。あな嬉しや、嬉しや。喜ばしや

(二人相擁して泣くところにて)

幕

師範學校 國文教科書 本科用卷四終

師範學校 國文教科書 本科用卷四附録

第四篇 表記法

一 送假名法

送假名

漢字を以て國語を寫すに當り、助動詞、助詞等の如き相當の漢字なき語は當然假名を用ひざるべからず。又動詞形容詞の如く相當の漢字はあれど、その活用形を示す道なきものは漢字の下に假名を添へざるべからず。通例假名交り文に於ては名詞、代名詞の如き體言は漢字を用ひ、動詞、形容詞の如き用言は漢字に送假名を添ふるものとす。されど送假名には未だ一定せる標準なし。今國定小學讀本に用

送假名法の四綱領

ひたる送假名法の大要を示さん。

送假名法の四綱領

- 一 活用語の語尾變化を書きあらはすこと。
- 二 語の末に附屬する助詞助動詞をかきあらはすこと。
- 三 語の末に含まる、接尾語を書きあらはすこと。
- 四 漢字を音讀せるものは漢字以外の音を書きあらはすこと。

今左に例を舉げて之を略説せん。

一 活用語は語尾を送る。

1 普通の語尾

書ク 落チテ 死ナズ 出デシ (動詞)
 高ク 清シ 同ジキ年 嬉シケレ (形容詞)
 可シ 如ク (助動詞)

2 音便

説イテ 乞ウテ 積ンデ 悲シイカナ

3 所謂延言

願ハク 恐ラク

〔除外〕 日はハを送らず。

子曰く巧言令色鮮し仁。

二 活用語の語幹にもとの活用語の語尾を含むものは之をも送る。

動カス 轉バス 語ラフ 塞ガル
 悲シム 苦シム 全クス 辱ウス 嬉シガル
 騒ガシ 喜バシ 歎カハシ

〔除外〕 本則に相當する活用語にてもその本形三音以内のものは語尾のみを送る。

分ツ 盡ス 惜ム 戀シ

三 副詞より轉じたる活用語は尙副詞の送假名をも附す。

復ビス 未ダシ 甚ダシ

四 活用言の熟語はそれごとく送假名を附す。

思ヒ出ス 霞ミ渡ル 數ヘ盡シ難シ。

〔除外〕 熟語の上の動詞二音なる時は読みまがふ虞なき

かぎりその語尾の送假名を省く。

召使フ 請取ル 引合ス

折リ込ム 立テ通ス 明ケ過グ

五 活用語より轉じて副詞・接續詞に用ふるものはその活用

を書きあらはして送假名とす。

極メテ 總ジテ 及ビ 代ル代ル

〔除外〕 副詞・接續詞にのみ用ふる漢字の場合は尙六の例

による。

豫テ 於テ 雖モ 況ヤ

六 二音の副詞モシヨシヨクカクの四語及び三音以上の副

詞・接續詞に用ひたる漢字には最後の二音を送假名として添ふ。

若シ 縦シ 能ク 斯ク

併シ 殆ド 必ズ 尤モ 聊カ 甚ダ

〔除外一〕 各愈屢交偶抑の如く二音以上の語の重音にて

一字の漢字を當つるものは誤讀を生ずる虞ある時に

かぎり語の右側下にゝを附し送假名を附せず。

各人ノタメニ盡ス

〔除外二〕 日外加之就中假令生憎の如く漢字の熟語を訓

讀したるものには送假名を附せず。

七 名詞・代名詞等には送假名を附せざるを通則とすれども、

動詞より轉じて名詞となれるもの、中左のものには本

の動詞の活用を書きあらはして送假名とす。

1 漢字音を活用したる動詞の名詞となれるもの。

封^シ 通^ジ 察^シ 損^ジ

2 分詞の性質を有して名詞と動詞との間なるもの。

本ヲ買^ヒニ行ク

3 兩様に讀まるゝ語にして區別する必要があるとき。

渡^シ 預^リケ人一切^リ

4 漢字を音讀せる同形の語ありて區別する必要があるとき。

き。

樂^ミ樂 讀^ミ書^キ讀^書

八名詞・代名詞・數詞等の接尾語は送る。

重^ミ 寒^サ 何^レ 己^レ

憎^ゲ 一^ツ 萬^ヅ 半^バ

〔除外〕 二音の代名詞は接尾語を送らず。

我 誰 其 此 彼

句讀法

九單語に當てたる漢字僅に其の一部分に該當せりと見ゆる場合には、その他は送假名として書きあらはす。

指^サス 鞭^ウツ 春^メク 黃^バム

赤^ラム 薄^ラグ 安^ラケシ 安^ラカニ

定^マル 連^ナル 靜^ケシ 横^タハル

二 句讀法

文と文との關係、文中の語句節の相互の關係を明かにせんがために種々の符號を用ふ。之を句讀といふ。

句讀は國語の表記法としては未だ廣く通用せずと雖も、必要上漸次之を用ふるに至るものゝ如し。

句讀法は未だ一定せず。又性質上一定し難きこともあり。今大體國定小學讀本に用ひたる句讀法の大要を示さん。

句點

マル ○ マルは文のきれめにつく。

花咲く。

進め、ますらを。

讀點

テン、テンはその用法甚だ廣し。その重なるものは、

1 文の切れたる如くにて意味の續き居るとき、

進め、ますらを。

これは莖なり根にあらず。

人の短をいふことなかれ、己が長を説くことなかれ。

2 文意の兩義にとれ易きとき、

母子を抱く。

頼朝・範頼・義經をして平氏を討たしむ。

太郎は甚だ活潑なる運動を好む。

3 並列したる句節の間に、

父母は我を生み、我を養ひ、我を教へ給へり。

規律の整へる、時間正しき、感ずるに堪へたり。

4 特に提起したる語句の下に、

高山彦九郎・蒲生君平・林子平、此の三人を世に寛政の三奇士といふ。

5 句節の長くなりて甚だしく誦讀に不便なるとき

午前六時までに乗車する者に限り、割引す。

磊落と粗放とは似て非なるものなれば、どりちがふべからず。

特派員として佛蘭西の戦線に出張せしめたる社員某の發したる第

一回の通信は、昨日始めて本社に達したり。

並列點

クロマル・並列せる名詞の間につく。

孔子・釋迦・耶穌・クラテス、之を世界の四聖といふ。

カギ「」すべて他の文に對して挿入の文を區別するに用
ふ。

1 對話又は引用の文

時の人の死せる孔明、生ける仲達を走らす。といへり。

句畫

複句書

2 獨思の文

古書に「日本は神國なり」とあり。

「今年こそはしつかりやらう」と決心した。

フタヘカギ「」挿入文の中にあらはるゝ挿入文を區別するに用ふ。

父は文吉に「もし遊びに行つて選舉をしなかつたら、人は文吉のおとうさんは村のためを思はないんだ」とわるくいふだらう」といひました。

句讀法の大要は右の如くなれど、讀者の誤解を招き不便を感じざる限は、更にこの符號を省略するも妨なし。

三 分別書方

分別書方

語句のきれめを明かにせんがため或字と字との間を離して書きあらはす書方を分別書方といふ。羅馬字にては尤

も必要なれど、漢字交り文にてはそれほど必要にはあらず。假名文にては分別書にするを便とすれど、未だ一般には行はれず。

國定小學讀本の分別書方は、單語は各別に離して書くを原則とし、只左の如き單語は分別せざるものとす。
一 助動詞(指定の助動詞を除く)

タイソウ ウツクシカッタ。

ナカナカ スグニ ハ ユキマセン。

ヨイ テンキ デス。(除外例)

アレ ハ ヤマ ダ。(除外例)

二 助動詞テ・タリが活用言の下に来るとき

ニイサン ハイマ ヘイタイ ニ イツテ キマス。

ワタクシ ハソト ガ カタクテ 中 ガ ヤハラカ デス。

イモウト ノ モリヲ シタリ オツカヒ ニ イツタリ シマス。

三 助詞バ・シ

ミレバ。ワカル。
サムケレバ。イソゲ。
ジモカクシ。エモカク

尙左に分別書の例をあげん。

オキク ト オハナ ガ オキヤクアソビヲ シテ キマス。オハナ
ガ オキヤクデス。「ゴメン クダサタイ。」ヨク イラツシヤイマシタ。
ドウゾ オアガリクダサイ。オキク ハ オハナヲ ザシキヘ
トホシテ、オチャヲ ダシマシタ。

師範學校 國文教科書 本科用卷四附錄終

師範學校國文教科書 本科用 卷四

大正	大正	大正	大正	大正	大正
五	四	三	二	一	一
年	年	年	年	年	年
十一月	十二月	十二月	十二月	十二月	十二月
十日	十日	十日	十日	十日	十日
修正	修正	修正	修正	修正	修正
版	版	版	版	版	版
發行	發行	發行	發行	發行	發行

大正	大正	大正	大正	大正	大正
二	三	四	五	六	七
年	年	年	年	年	年
十一月	十一月	十一月	十一月	十一月	十一月
三十日	三十日	三十日	三十日	三十日	三十日
修正	修正	修正	修正	修正	修正
版	版	版	版	版	版
發行	發行	發行	發行	發行	發行

卷	定價	臨時定價
卷一	金五拾錢	金九拾錢
卷二	金四拾錢	金八拾錢
卷三	金四拾錢	金七拾錢
卷四	金四拾錢	金七拾錢



本館發行之教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に
賣切等にて課業に御差支の節は直接御註文被下候はゞ直に御送附可致候

印刷者 四海民藏

發行所 光風館書店

發行者 上原才一郎

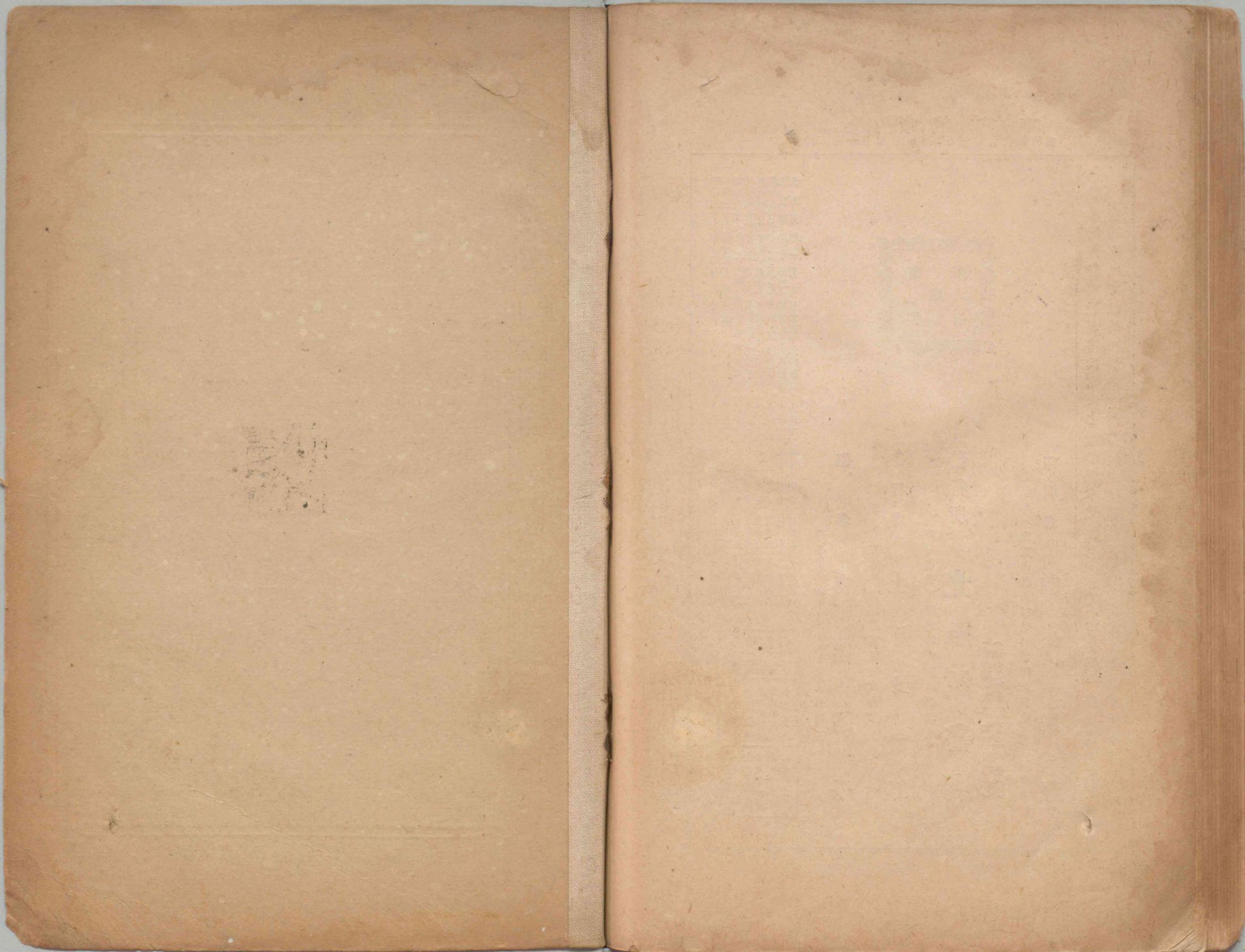
編者 吉田彌平

東京市神田區通神保町六番地

東京市神田區通神保町六番地

東京市神田區高田老松町五十二番地

(電話) 大手七三三〇番
(據替) 口座東京三二七番





広島大学図書

2000040732

